



横浜市
幼保小連携・接続に関する調査 2021
報告書

横浜市こども青少年局
横浜市教育委員会

調査 2021 の趣旨 ならびに調査について

【名 称】 「令和3年度 横浜市幼保小連携・接続にかかわる調査 2021」

【実態調査の趣旨】

横浜市子ども・子育て支援事業計画の基本政策1「乳幼児期の保育・教育の充実と学齢期までの切れ目のない支援」において、保育・教育の質確保・向上に向けた幼保小の連携や交流、接続カリキュラム等の実施状況を把握するため、市内保育施設、小学校を対象とした実態調査を実施した。また、調査結果を活かし、幼保小連携諸事業の現状と課題について考察するとともに、課題解決に向けた新たな取組につなげていく。

- 【調査対象】 (1) 横浜市内の幼稚園・認定こども園・公立保育所・私立保育所
 ※年長児が在籍していない（新規開設を含む）施設も調査対象としています。
 (2) 市立小学校・義務教育学校（前期課程）※令和元年度から、横浜市立特別支援学校を除く

【調査方法】 アンケート方式（令和3年10月5日～11月30日）

- (1) 幼稚園・認定こども・公立保育所・私立保育所 : 横浜市電子申請システム
 (2) 市立小学校・義務教育学校 : 学校便利帳 簡易集計システム

【調査対象期間】 令和2年10月～令和3年7月（令和3年度小学校入学児童の接続期を対象）

【回収状況】

	令和元年度			令和2年度			令和3年度		
	全体数	提出数	回収率	全体数	提出数	回収率	全体数	提出数	回収率
幼稚園	241	153	63%	229	152	66%	226	180	80%
認定こども園	49	44	90%	55	50	91%	60	51	85%
私立保育所	727	504	69%	752	500	66%	771	591	77%
公立保育所	73	73	100%	69	69	100%	65	65	100%
小学校・義務教育学校	341	341	100%	340	340	100%	339	339	100%
合 計	1431	1115	78%	1445	1111	77%	1461	1226	84%

【調査担当】

幼稚園、認定こども園、保育所・・・子ども青少年局 子育て支援課 幼保小連携担当
 小学校・義務教育学校・・・教育委員会小中学校企画課

【報告書編集・発行】

子ども青少年局保育・教育人材課幼保小連携担当 671-3731

幼児教育施設編（令和2年10月～令和3年3月までの取組）

□ 幼児教育施設 回答率：79%（887園/1122園）

I 幼保小の交流活動に関すること

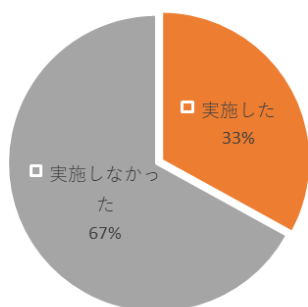
問1 2020年10月～2021年3月までに実施した交流活動を教えてください。（あてはまるもの全て）

1	新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、特に実施しなかった	623
2	小学校の授業時間を中心とした交流（直接の対面交流でなくてもかまいません）	165
3	作品展・栽培・収穫体験等の行事での交流（直接の対面交流でなくてもかまいません）	90
4	近隣の園などの保育・教育施設同士の子どもたちの交流	129
5	園や小学校の校庭・園庭、施設、図書館、遊具などの利用を通しての交流	74
6	小学校の児童を園に招いての交流	23
7	避難訓練・防災訓練等を合同で行う	12

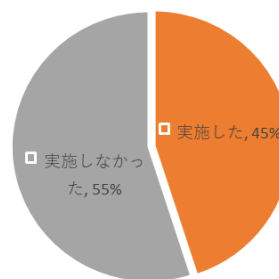
問2 交流（直接の対面交流でなくてもかまいません）できた回数の合計を教えてください。

1	0回	623	70%
2	1回	160	18%
3	複数回	104	12%

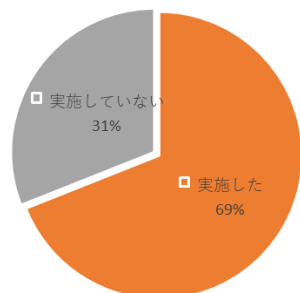
小学校との交流を実施した割合（幼稚園）



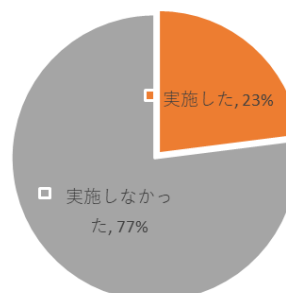
小学校との交流を実施した割合（認定こども園）



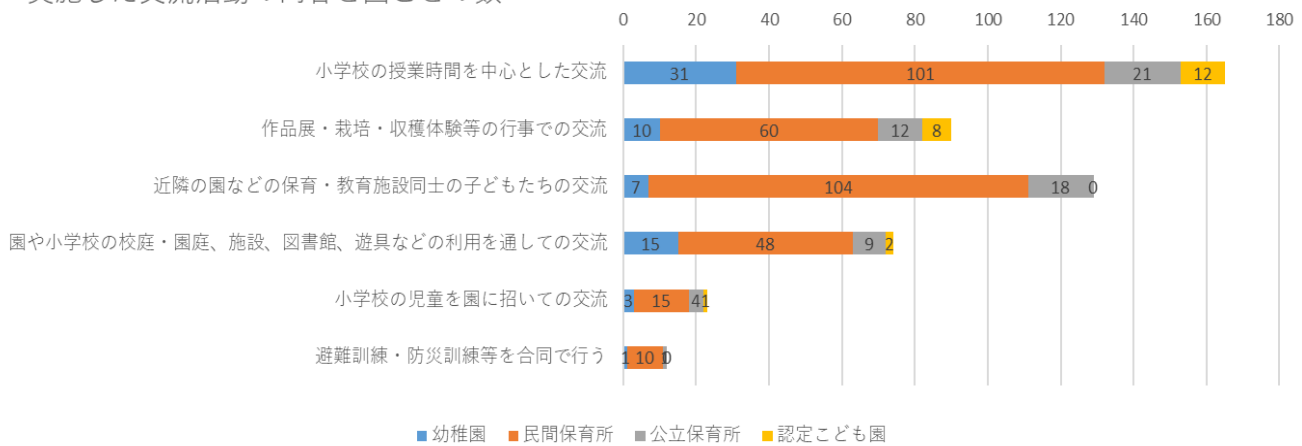
小学校との交流を実施した割合（公立保育所）



小学校との交流を実施した割合（民間保育所）



実施した交流活動の内容と園ごとの数



【調査結果から】

コロナ禍にあって、多くの園で子どもたち同士の交流が実施できなくなりましたが、手紙やビデオレター、手作りの遊び道具をプレゼントするなど、授業や保育の時間で間接的に交流活動を行っている園もあることが分かりました。子どもたちに交流体験できる場を工夫して準備し、いかにして実りのある機会にするか、園と小学校とで相談しながら取組を進めてきたことが意見として寄せられました。

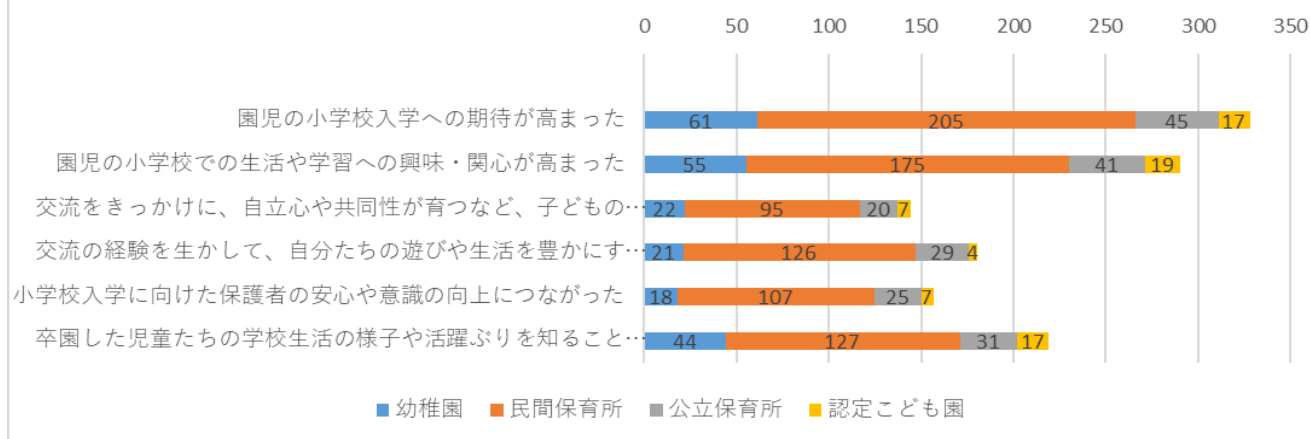
【アンケートに寄せられた園からの意見】

- ・コロナ禍の為、園児と児童の直接の交流はできなかったが、手紙(ドキュメンテーション)などのやりとりを行い、小学校への期待を膨らますことができた。
- ・年長児に向けて小学生が作ってくれた学校案内 DVD を、園で観た。子ども達も就学することに興味や関心が湧いた。
- ・小学校から年長児へ「学校かるた」「学校すごろく」等のプレゼントがあり、間接的に交流ができた。
- ・保育園の子どもたちから学校生活について質問を手紙にまとめ小学校へ送った。小学校側からは、その質問に対して動画 (DVD) にして、回答をしてもらい、交流することができた。
- ・プールで捕獲したヤゴを小学生から譲り受け、育て方を教えてもらい、飼育を通して交流することができた。
- ・コロナ禍で直接の交流ができないため、就学への見通しが持てるための交流活動を近隣小学校に相談した。すると、1年生の生活科授業の取り組みとして小学校校内の様子を撮影しコメントを添えホームページに載せてくれた。保育の中で就学児とホームページを見ることができ、不安だった小学校へ期待を持つことができた。
- ・近隣小学校から、学校紹介の DVD や児童作成の図鑑などを頂き、年長園児と就学に期待を持てる教材として保育で活用させてもらった。
- ・近隣保育園とも DVD のやりとりで共に1年生になる友達の存在を感じられるように、園庭で遊んでもらった。

問3 交流したことでの成果と考えられるものは何ですか。(あてはまるもの全て)

1	実施できなかったのがわからない	480
2	園児の小学校入学への期待が高まった	328
3	園児の小学校での生活や学習への興味・関心が高まった	290
4	交流をきっかけに、自立心や共同性が育つなど、子どもの成長につながった	144
5	交流の経験を生かして、自分たちの遊びや生活を豊かにすることができた	180
6	小学校入学に向けた保護者の安心や意識の向上につながった	157
7	卒園した児童たちの学校生活の様子や活躍ぶりを知ることができた	219

交流したことによる成果と回答した内容（園数）



【調査結果から】

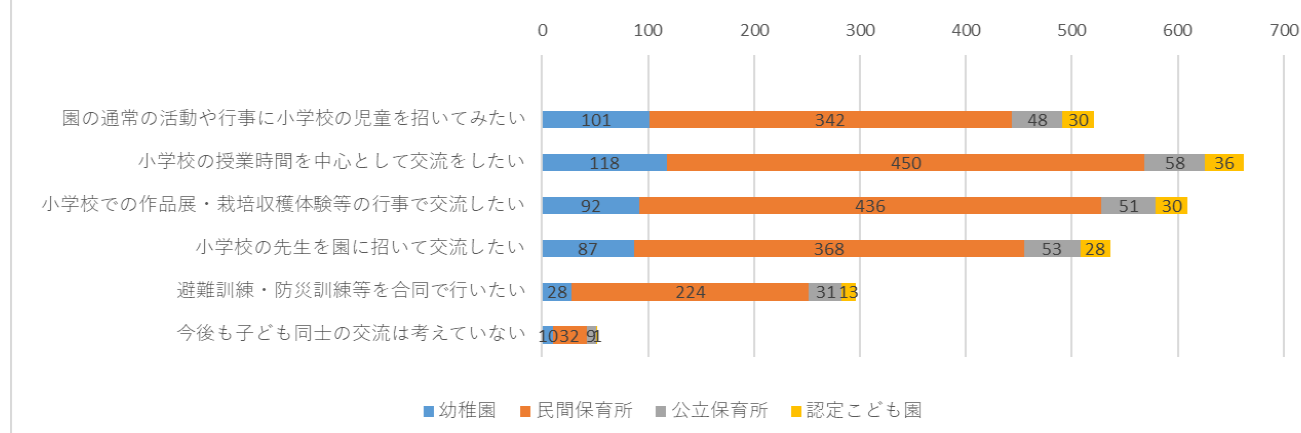
今年度は交流できなかった園からも、以前の経験から「交流したことによる成果」を回答いただきました。交流したことによって「園児の小学校入学への期待が高まった」「園児の小学校での生活や学習への興味・関心が高まった」との回答が多く寄せられています。遊びの中で文字や数量への関心が育ったり、好奇心や人とのコミュニケーション力が養われたりするなど、学びの芽生えを大切にしたい年長児の保育とのつながりを実感します。さらに、「交流の経験を生かして自分たちの生活をより豊かにできた」とする園が180もあり、具体的な体験を通じて学ぶ意欲を育てていることが分かりました。

また、「卒園した子どもたちの学校生活の様子を知ることができた」と回答する園も多く、就学した子どもたちを長い目で見守り、成長をともに喜び合う保育者の温かいまなざしが感じられます。

問4 感染状況が落ち着いた段階で、実施したい交流活動を教えてください。（あてはまるもの全て）

1	園の通常の活動や行事に小学校の児童を招いてみたい	521
2	小学校の授業時間を中心として交流をしたい（オンラインの活用を含め）	662
3	小学校での作品展・栽培収穫体験等の行事で交流したい	609
4	小学校の先生を園に招いて交流したい	536
5	避難訓練・防災訓練等を合同で行いたい	296
6	今後も子ども同士の交流は考えていない	52

感染状況が落ち着いた段階で実施したい交流活動（園数）



【調査結果から】

小学校との交流は、園児にとって小学校生活の見通しや成長への憧れをもち、就学への期待を高める上で欠かせないものという認識が広がっており、感染状況が落ち着けば、小学校を知ることできる交流活動を様々に行いたいという回答が多く寄せられました。

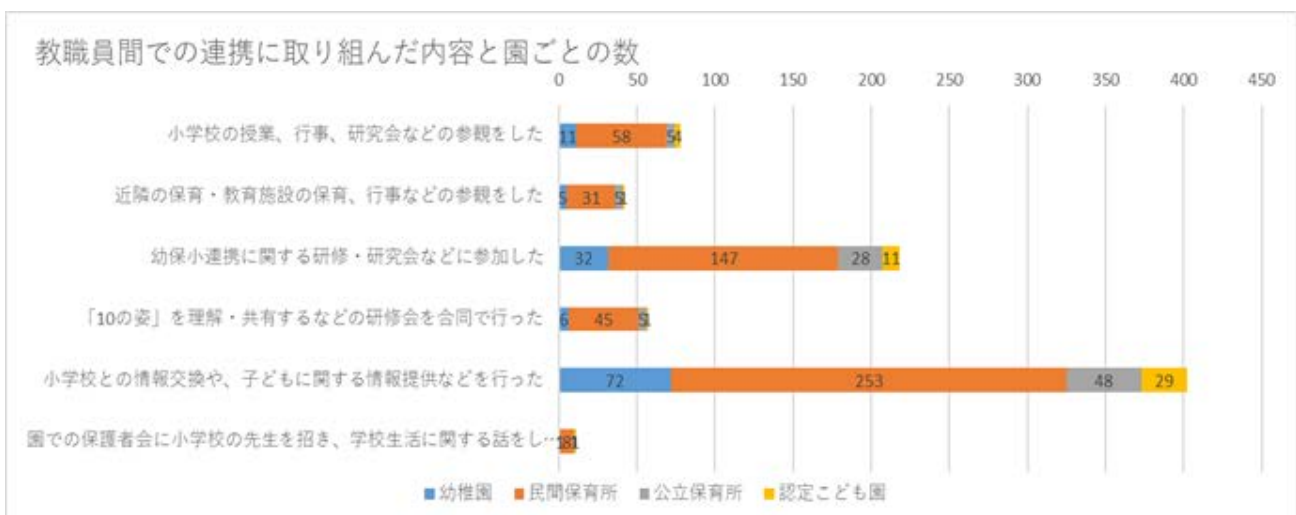
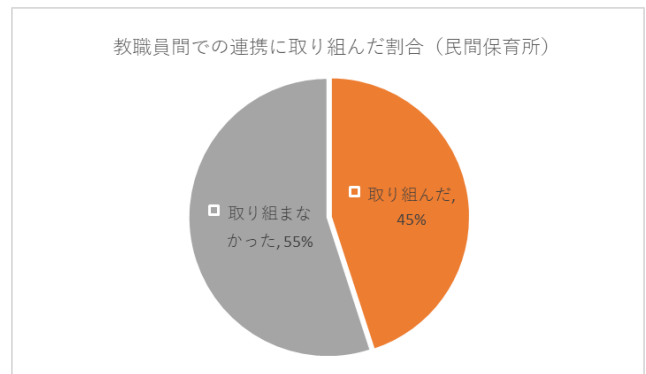
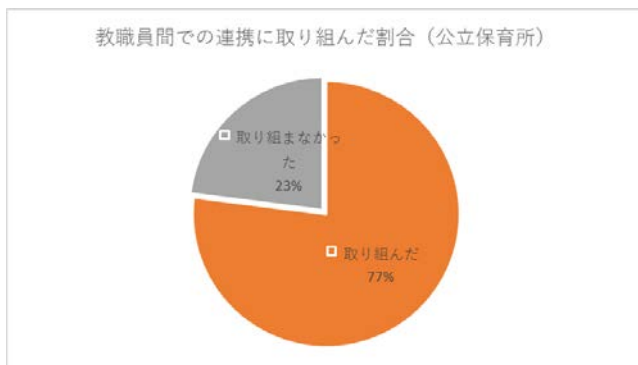
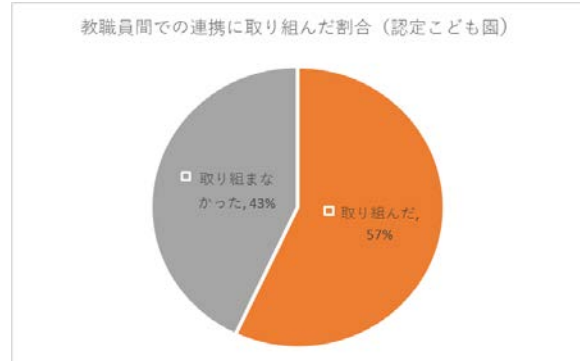
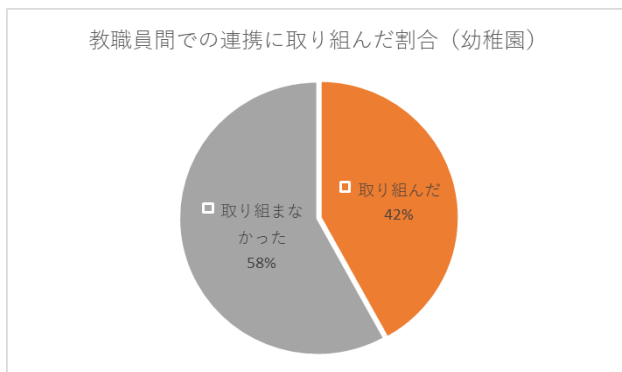
Ⅱ 幼保小の連携に関すること (区やブロックの交流事業も含みます)

問5 2020年10月～2021年3月までに実施した教職員間での連携の取組を教えてください。
(あてはまるもの全て)

1	新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、特に実施しなかった	469
2	小学校の授業、行事、研究会などの参観をした(オンラインでの実施を含む)	78
3	近隣の保育・教育施設の保育、行事などの参観をした(オンラインでの実施を含む)	42
4	幼保小連携に関する研修・研究会などに参加した(オンラインでの実施を含む)	218
5	「10の姿」を理解・共有するなどの研修会を合同で行った(オンラインでの実施を含む)	57
6	小学校との情報交換や、子どもに関する情報提供などを行った	402
7	園での保護者会に小学校の先生を招き、学校生活に関する話をしてもらう機会を設けた	11

問6 連携(オンライン等での実施を含めて)できた全ての取組の合計の回数を教えてください。

1	0回	469	53%
2	1回	131	15%
3	複数回	287	32%



【調査結果から】

近隣の小学校・園の職員間連携の取組では、小学校との情報交換や子どもに関する情報提供など 400 を超える園で実施していることが分かりました。日頃から「顔の見える関係」を築き、子どもの状況や支援ニーズを共有してより細やかな支援につなぎ、それまでの育ちや学び、園での支援を引き継いでいこうとする取組が定着していることを示しています。また、コロナ禍にあっても交流活動を実施するための方法の検討や振り返りを行う等、職員間での連携が深まったという園の声を寄せられました。

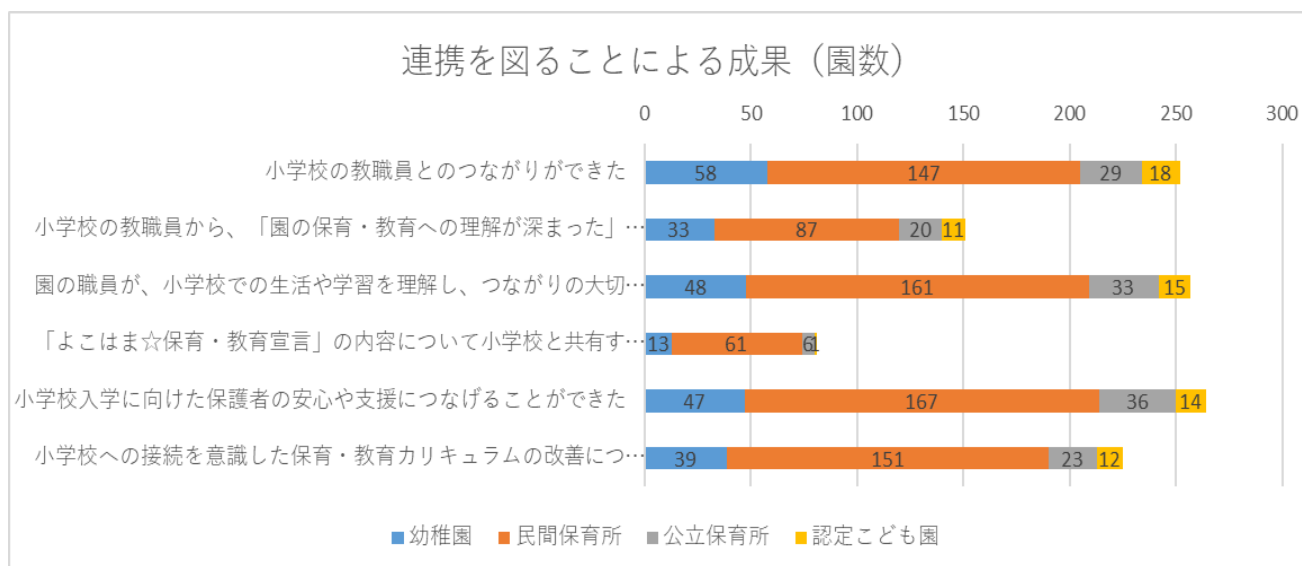
幼保小連携に関する研修会に参加し、幼児教育と小学校教育との接続の重要性について学ぶ機会にしている園も 200 を超えています。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10 の姿）」を理解・共有するなどの研修会を園と小学校と合同で行い、カリキュラムや保育・教育方法の充実や改善に積極的に取り組んでいるという意見もありました。

【アンケートに寄せられた園からの意見】

- ・同じ地域の年長担任職員による、オンラインを活用した話し合いを設け、どのような交流が可能かなど検討した。
- ・本園の保育を記録した1年分のドキュメンテーションを小学校に送付し、保育所生活の理解を深めてもらった。
- ・小学校の先生に園を訪問してもらい、年長児クラスの保育の様子を参観してもらった。
- ・「10 の姿」について園内で研修を全職員で実施した。また、年長クラス保護者会にて、育んでいきたい「10 の姿」について、就学に向けた課題と成長の様子や保育園から小学校へと育ちを繋げて行くための連携の大切さなどを含め伝え、理解を深めるようにした。
- ・5歳児クラスの懇談会にオンラインで、小学校の先生に参加してもらった。保護者からの質問や、学校生活の話をしてもらった。

問7 連携を図る取組を実施してよかった点は何ですか。(あてはまるもの全て)

1	実施できなかったのわからない	430
2	小学校の教職員とのつながりができた(つながりが深まった)	252
3	小学校の教職員から、「園の保育・教育への理解が深まった」という感想が聞かれた	151
4	園の職員が、小学校での生活や学習を理解し、つながりの大切さを理解することができた	257
5	「よこはま☆保育・教育宣言」の内容について小学校と共有することができた	81
6	小学校入学に向けた保護者の安心や支援につなげることができた	264
7	小学校への接続を意識した保育・教育カリキュラムの改善につなげることができた	225



【調査結果から】

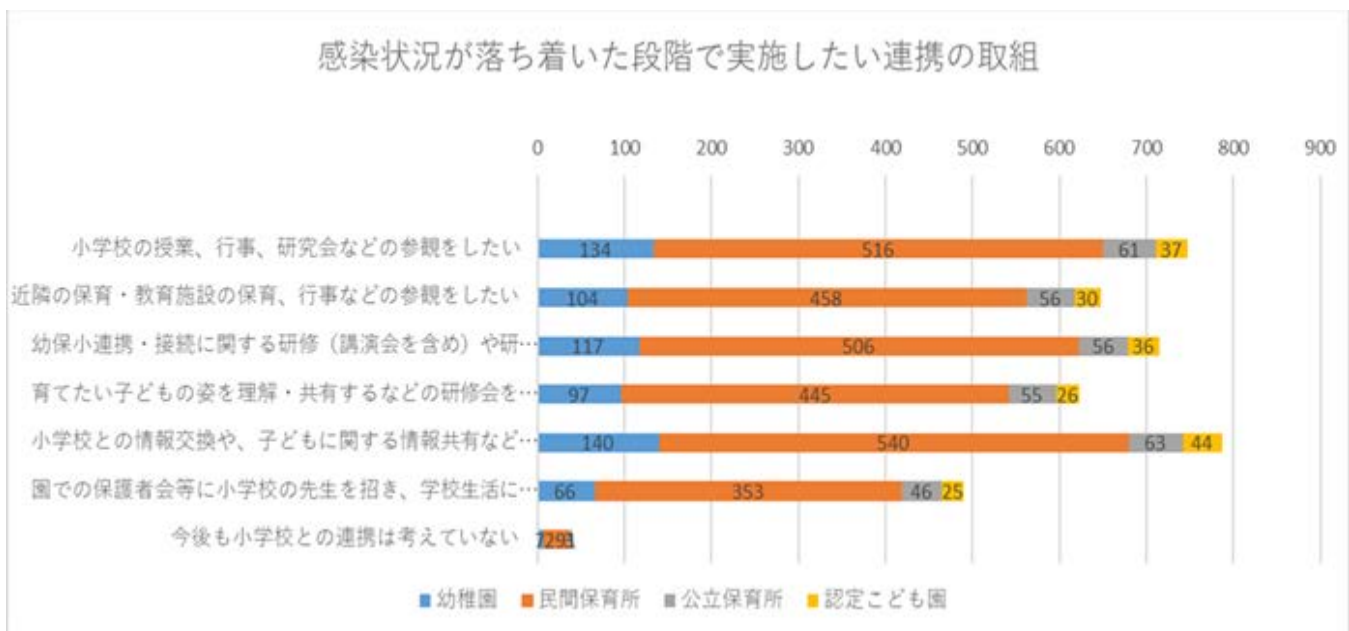
教職員間での連携に取り組んだ6割近くの園では、「小学校の教職員とのつながりができた」「小学校入学に向けた保護者の安心や支援につなげることができた」という成果が上げられています。

また、「園の職員が小学校での生活や学習を理解し、つながりの大切さを理解することができた」ことや「小学校への接続を意識した保育・教育カリキュラムの改善につなげることができた」を成果として6割の園が挙げており、就学する子どもの姿、育ちについて共有することの重要性を理解し、取組を進めていることが分かりました。

さらに、保育者と小学校教諭とで園児の課題や支援がどうであったか等、カンファレンスの場を設け、卒園時の情報共有だけでなく、その後の育ちについて評価し合う場をつくっていくことの重要性を問いかける意見や「よこはま☆保育・教育宣言」の内容について、小学校と共有する機会を作りたいという意見も寄せられました。

問8 感染状況が落ち着いた段階で、実施したい連携の取組を教えてください。(あてはまるもの全て)

1	小学校の授業、行事、研究会などの参観をしたい	748
2	近隣の保育・教育施設の保育、行事などの参観をしたい	648
3	幼保小連携・接続に関する研修（講演会を含め）や研究会などに参加したい	715
4	育てたい子どもの姿を理解・共有するなどの研修会を園と小学校との合同で行いたい	623
5	小学校との情報交換や、子どもに関する情報共有などを行いたい	787
6	園での保護者会等に小学校の先生を招き、学校生活に関する話をしてもらいたい	490
7	今後も小学校との連携は考えていない	40



【調査結果から】

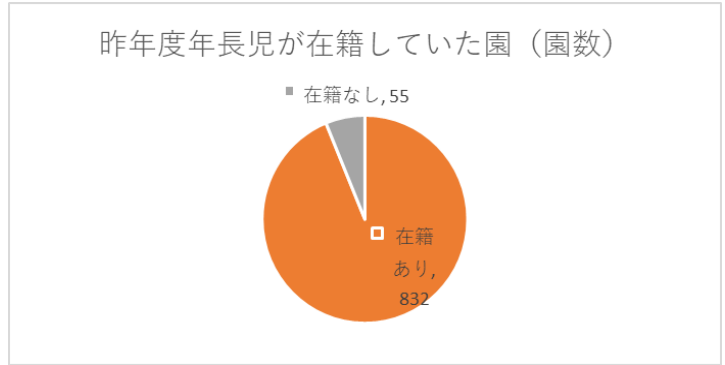
感染状況が落ち着いた状況になった場合、どの項目においても教職員間での連携に取り組んでいきたいという回答が寄せられました。一方、連携先の小学校にとっては、学区の範囲を超えて入学する園児もいるため、どの園とも連携することはなかなか難しいという意見もありました。

そこで、各区で取り組む教育交流事業のブロック内を活用すること、管理職・幼保小の担当者が変わってもゼロから出発にならないように組織として意義を理解し、業務の引継ぎを行えるようにすること、保護者会等で「小学校へ向けて」の話を行っているので、小学校から園の保護者へ伝えておいてほしいこと等を共有する機会を作ること、など安定して取り組むための仕組みを整えていく必要があります。

Ⅲ 幼保小の接続に関すること

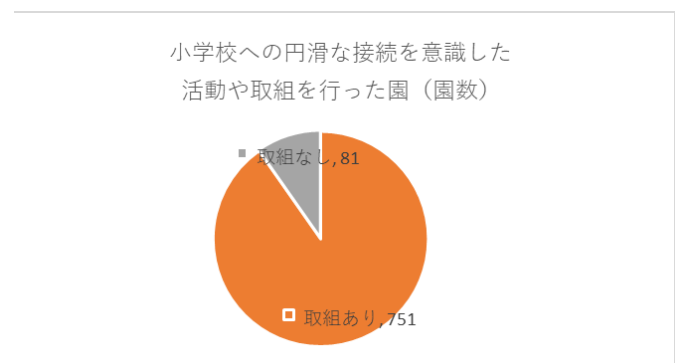
問9 前年度（令和2年度）に、園に年長児が在籍していましたか。

1	はい	832
2	いいえ	55



問10 2020年10月～2021年3月の間、の編成や実践において、小学校への円滑な接続を意識した活動や取組を行いましたか。

1	はい	751
2	いいえ	81



年長児の在籍する園では、90%を超える園で接続を意識した年長児の保育・教育カリキュラムに取り組んでいることが分かりました。

問11 「はい」と回答した園では、どのような取組を行いましたか。

（左から「まったくあてはまらない」「あまりあてはまらない」「まああてはまる」「とてもあてはまる」）

Q	子どもたちの遊びの中で、知的好奇心を育み、予想や見通しを立て自ら学べるようにする等、学びの芽生えを大切にしたりした遊びや活動に取り組むようにした	子どもたちに人とつながりや、友達とともに目標を達成する喜びが感じられるようにする等、協同的な遊びや体験活動に取り組むようにした	子どもたちが安心して就学を迎えられるように、小学校生活を具体的にイメージした活動や、意欲や自立心を高める活動に取り組むようにした	「10の姿」を手掛かりに子どもの育ちを捉えるとともに、年長児の遊びを通した学びの特性を踏まえ、指導計画を作成したり、改善を図ったりした	近隣の小学校、または連携先の小学校が実施する「スタートカリキュラム」について、園の職員（園長や年長児担任、担当者等）が知る機会を設定した	園と小学校とで、お互いのカリキュラムの内容を共有したり、よりよい接続期のカリキュラムになるように協働で協議・研究したりする機会を設定した
1	-14	357	378			
2	-9	283	458			
3	-161	397	292			
4	-456	386	305			
5	-132	-297	240	82		
6	-307	-311	100	33		

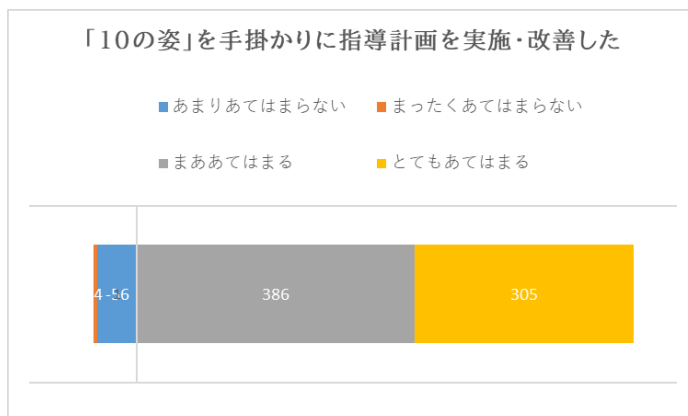
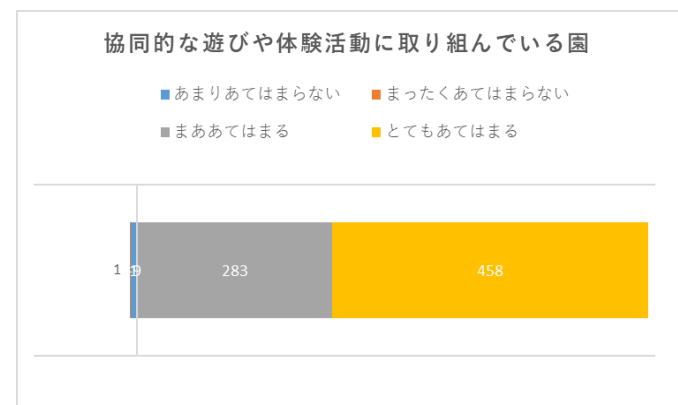
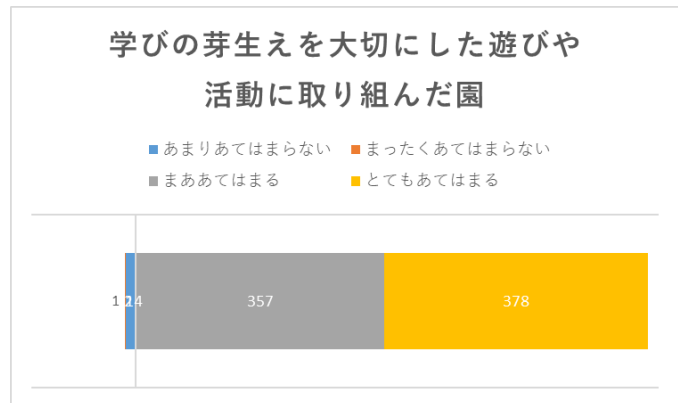
【調査から】

Q1～Q3は、「横浜版接続期カリキュラム」にあるアプローチカリキュラムの3つのねらいを設問に置き換えたものですが、それぞれ「とてもあてはまる」または「まああてはまる」と8割を超える園が回答しています。「要領・指針」に小学校以降の教育とのつながりを踏まえ、幼児期に育みたい資質・能力が示されたとおり、園では、3つの資質・能力が小学校以降も育成されていくことを理解し、小学校とともに子どもを育てていくという考え方が浸透したことを表しています。それぞれの園が小学校への接続を見通した全体的な計画を作成し、カリキュラムの接続を通して子どもの育ちと学びをつないでいくことの重要性が広く共有されていることが分かります。

Q1の設問に対しては、9割を超える園が「とてもあてはまる」または「まああてはまる」と回答しているように、遊びを通して学ぶという幼児期の特性を踏まえた保育・教育が施設類型の違いを超えて展開され、小学校での学びの基礎（学びの芽生え）を築いていることが分かります。

また、Q2の設問に対しては、「とてもあてはまる」と回答した園が全体の半数を超えています。「集団の一員としての自覚」をもって活動するようになる年長児の発達段階を踏まえて、園ではクラスで共通の目的を意識した活動をしたり、自分の役割を理解して活動したりする等、みんなで協力することの楽しさや、ルールの大切さ、達成感を味わえるような協同的な遊びを通して、総合的な学びを実現していることが分かります。

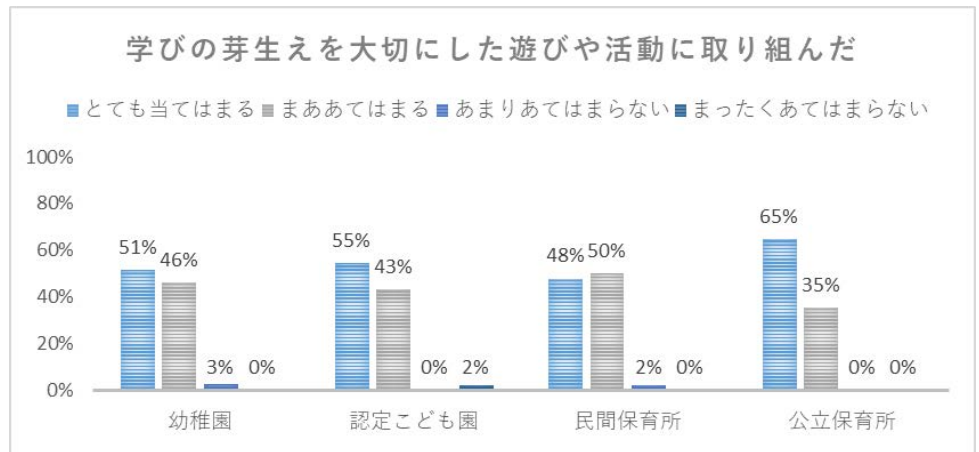
こうした幼児期における教育の成果を生かした小学校での「スタートカリキュラム」の工夫・改善を一体的に検討する等、遊びや生活での気付きから探究へという学びのプロセスを幼保と小で語り合うような取組を広げていくことがますます重要であると考えます。



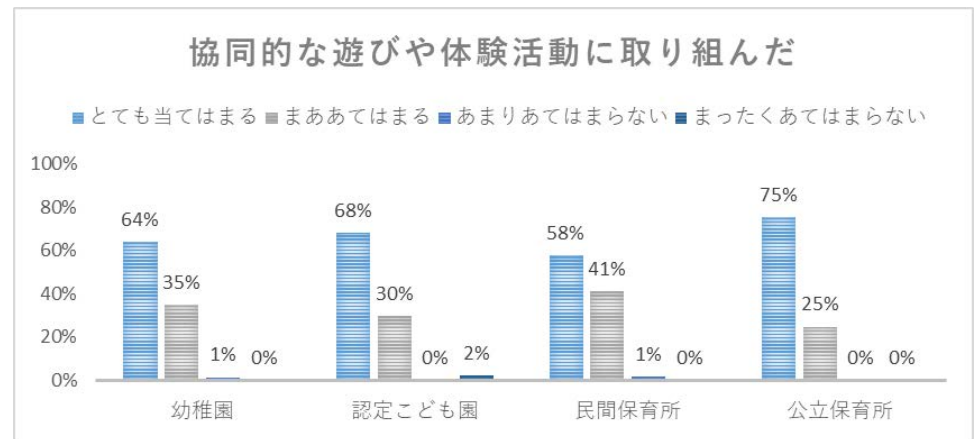
さらに、Q4の設問に対して、8割を超える園が「とてもあてはまる」または「まああてはまる」と回答しているように、「3つの資質・能力」の芽生えを促す指標として「10の姿」を意識しながら、年長児の保育・幼児教育を行っていることがわかりました。

小学校でのスタートカリキュラムでは、この姿をもとに教科等の教育につないでいくことが求められているので、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえた意見交換、保育参観や授業参観を行い、幼保と小の指導内容について学ぶ機会や、子どもの様子をもとに、新しい教育要領や指針を踏まえた保育・教育について学び合う機会を設ける等、連携を進めていく必要があります。

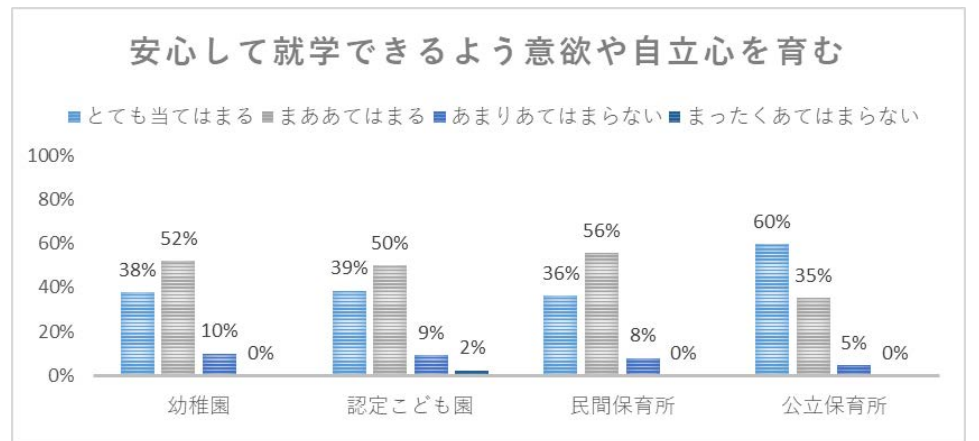
Q 1 : 子どもたちの遊びの中で、知的好奇心を育み、予想や見通しを立て自ら学べるようにする等、学びの芽生えを大切にしたい遊びや活動に取り組むようにした。



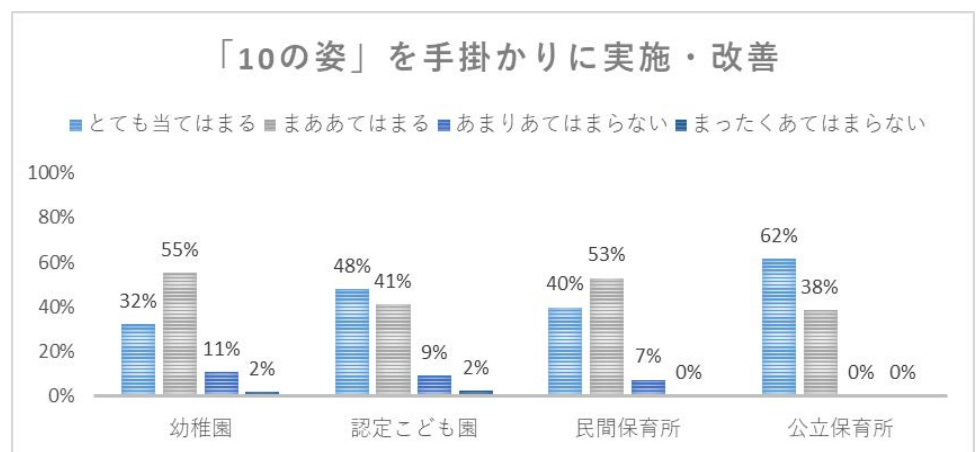
Q 2 : 子どもたちに人とのつながりや、友達とともに目標を達成する喜びが感じられるようにする等、協同的な遊びや体験活動に取り組むようにした



Q 3 : 子どもたちが安心して就学を迎えられるように、小学校生活を具体的にイメージした活動や、意欲や自立心を高める活動に取り組むようにした



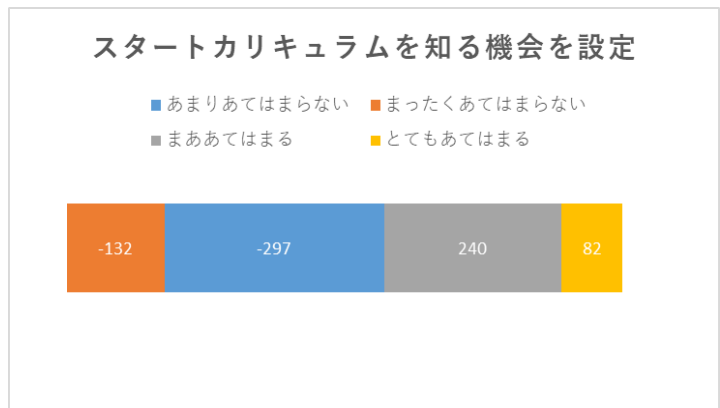
Q 4 : 「10の姿」を手掛かりに子どもの育ちを捉えるとともに、年長児の遊びを通じた学びの特性を踏まえ、指導計画を作成したり、改善を図ったりした



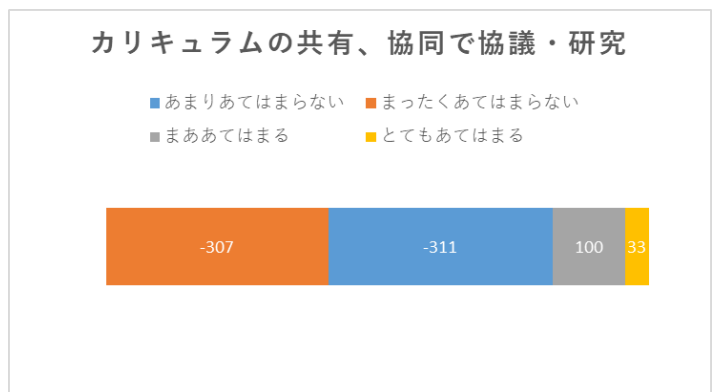
【調査から】

Q 5及びQ 6は、中央教育審議会の「幼保小の架け橋特別委員会」でも課題が指摘されている、資質・能力をつなぐカリキュラムの編成・実施に関わる設問となっています。

Q 5については、「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」と回答する園が、全体の半数を超えています。園と小学校の教職員が子どもの姿を見合ったり、語り合ったりする等、お互いの指導内容や支援の方法について意見交換する機会を工夫して設定している連携推進地区等の実践をもとに、市内の園や学校に対して好事例を発信していく必要があります。

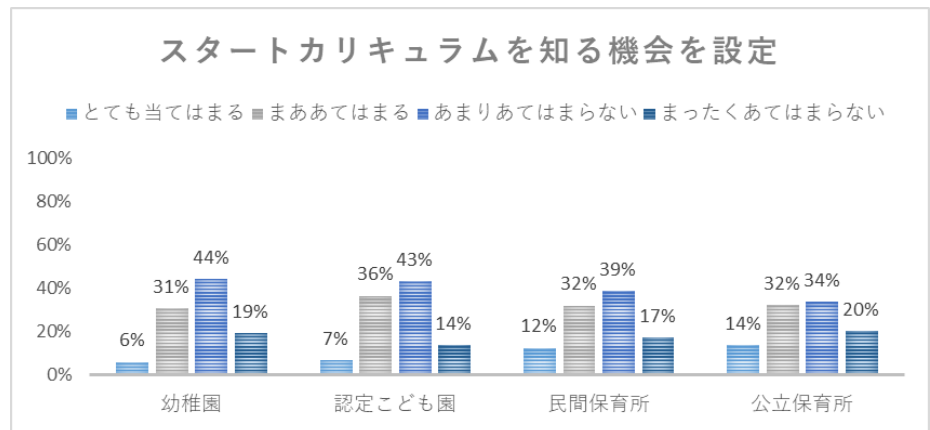


また、Q 6では、「とてもあてはまる」「まああてはまる」と回答した園が、全体の15%程度となっています。近隣の幼児教育施設と小学校教育（低学年）の関係者で「10の姿」を手掛かりとしながら共通の視点を持ち、教育課程や保育計画の改善につなげられるよう、モデル地区の横浜市接続期カリキュラム研究推進地区における実践を、研修会を通して普及させていきたいと考えます。

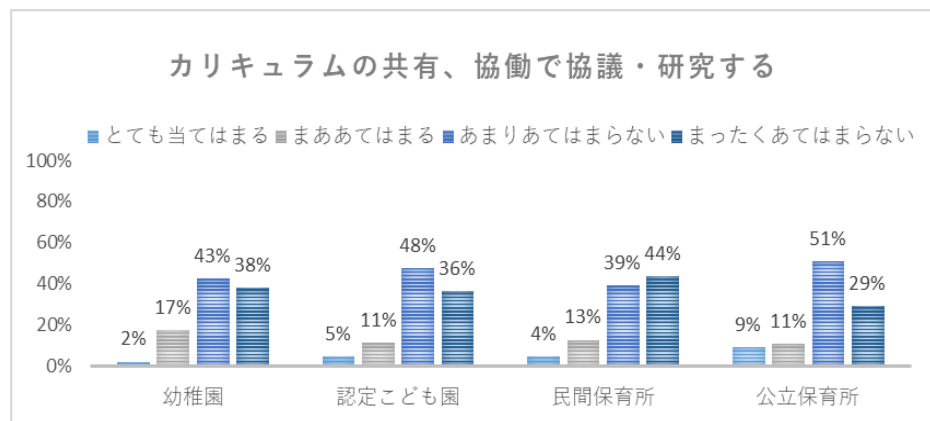


参考資料（施設種別ごとの結果）

Q 5：近隣の小学校、または連携先の小学校が実施する「スタートカリキュラム」について、園の職員（園長や年長児担任、担当者等）が知る機会を設定した



Q 6：園と小学校とで、お互いのカリキュラムの内容を共有したり、よりよい接続期のカリキュラムになるように協働で協議・研究したりする機会を設定した



問 12 小学校への円滑な接続を意識した取組をしてよかった点は何ですか。

(左から「まったくあてはまらない」「あまりあてはまらない」「まああてはまる」「とてもあてはまる」)

Q 1	幼児期に育まれた力が小学校教育にどのようにつながっていくのかをイメージできるようになった	-12	-100	489	150
Q 2	子どもたちの体験の幅を広げたり、遊びの質を高めたりするための環境構成を、より工夫するようになった	-7	-53	445	246
Q 3	「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を実践や振り返りにどう生かしたらいいのか、保育者・教員同士で話し合うようになった	-32	-151	404	164
Q 4	園と小学校とで「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」や「大切にしたい子どもの姿」等を引き継いだり、共有したりすることができた	-101	-210	333	107
Q 5	近隣の小学校、または連携先の小学校が実施する「スタートカリキュラム」について、理解が進んだ	-127	-318	260	46

【調査結果から】

- ・ Q 2 の設問に対して「とてもあてはまる」「まああてはまる」と回答した園の数が全体の 90% 以上あるように、小学校への円滑な接続を意識したことにより、子どもの学びの場が広がり、充実した教育活動につながったことを成果として実感できていることが分かりました。

小学校での音楽や図画工作の活動（映像等資料）を持ち寄り、様々な視点から意見交換することにより、園でのリズム遊びや造形遊びに教科とのつながりを意識したり、共同する楽しさや充実感を味わえる実践を工夫したりする例や、小学校での話し合い活動を意識して、身近な共通の問題を自分たちで考えたり、伝えあったり、解決したりする時間を大切にすることで仲間意識を育んでいった実践例が広がっています。
- ・ Q 1 及び Q 3 の回答にあるように、この時期ならではの活動に取り組んだことにより、年長児に資質・能力が育まれていることが「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を通して現れ、「10 の姿」の言葉を活用して、話し合うことで、小学校教育とのつながりをイメージできたと捉える園も多くなりました。
- ・ Q 4 及び Q 5 については、これからますます小学校と連携して具体的に取り組んでいくことが求められます。「遊び」は幼児期にふさわしい「学び」であること、遊びと生活の中で心も体もともに育つということについて、園と小学校とで共通理解を図っていききたいという声や、園で育まれた資質・能力を生かしていただくためにもっと小学校の先生方と「10 の姿」を共有していききたいという声も寄せられています。

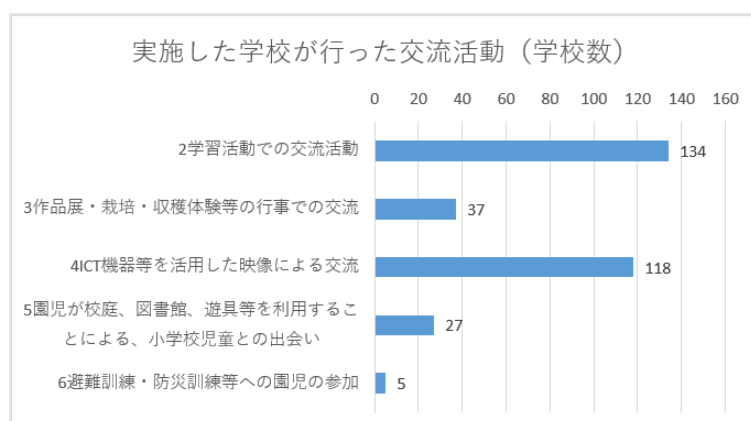
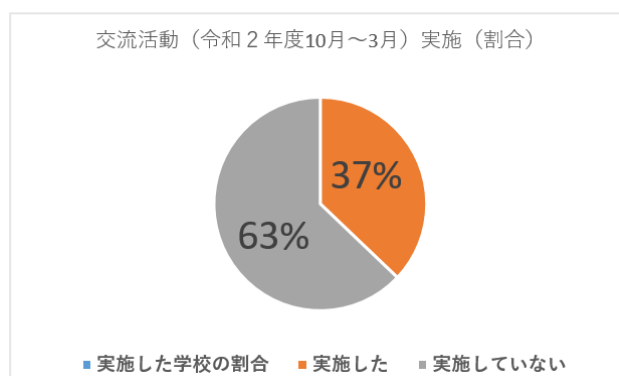
小学校編（令和2年10月～令和3年3月までの取組）

□小学校回答率 100% 全 339 校

I 幼保小の児童間の交流活動に関すること

問1 2020年10月～2021年3月に実施した交流活動を教えてください。（当てはまるもの全て）

1	新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、子ども同士の交流は実施しなかった	213
2	学習活動での交流活動（直接の対面交流でなくてもかまいません）	134
3	作品展・栽培・収穫体験等の行事での交流（直接の対面交流でなくてもかまいません）	37
4	ICT機器等を活用した映像による交流（動画交換など）	118
5	園児が校庭、図書館、遊具などを利用することによる、小学校児童との出会い	27
6	避難訓練・防災訓練等への園児の参加	5

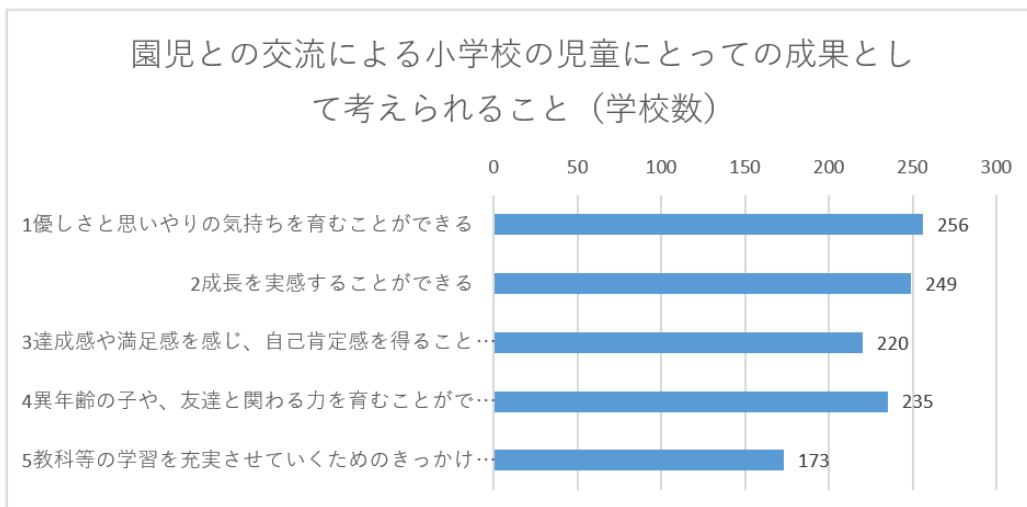


【分析】

- ・当該期間は、新型コロナウイルス感染症拡大の「第3波」と言われる期間であり、多くの学校で、子ども同士の交流については自粛されたものと思われる。
- ・学習活動での交流活動は134校で行われていた。また、多くの学校で、ICT機器を活用した映像による交流が行われていた。幼保小連携担当が、新しい交流の形について情報を集め、発信してきた効果も一定程度あったのではないかと考えられる。
- ・「ICT機器を活用した映像による交流」を選択した学校のうち、56校（およそ47%）が「学習活動での交流」を選択していないが、今後は様々な学年の学習活動に関連させ、学年のカリキュラムに位置づけられること期待したい。
- ・学校と園が隣接している場合、津波避難等を想定し、園側が合同での避難訓練について、希望を持っている場合が散見される。感染症の拡大もあり、当該期間内は5校で実施したという結果になっているが、今後は防災面での児童間の連携も見込まれる。

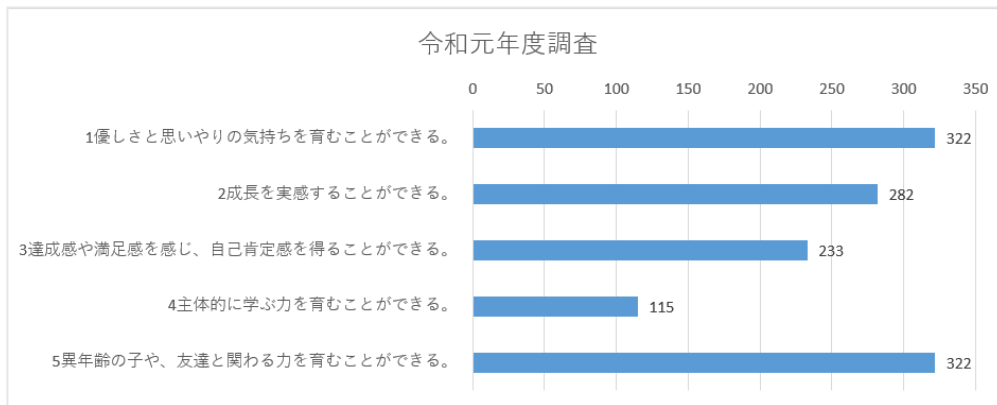
問2 園児との交流による小学校の児童にとっての成果は何ですか。 (あてはまるもの全てを選択)

1	優しさや思いやりの気持ちを育むことができる	256
2	成長を実感することができる	249
3	達成感や満足感を感じ、自己肯定感を得ることができる	220
4	異年齢の子や、友だちと関わる力を育むことができる	235
5	教科等の学習を充実させていくためのきっかけや目標になる	173



【分析】

- ・どの項目も、「交流活動を行えた (問1)」と答えた学校数を超過しており、園児との交流について、多くの学校が交流の効果を想定している。
- ・どの項目も、非認知能力の育成を意識して設定した。園児との交流は、小学校の児童にとっても、非認知能力の育成の一つの視点であると期待されていることがわかる。
- ・令和元年との比較では、軒並み数値が低くなっている。成果を実感する機会が得られなかったことが影響していると考えられる。

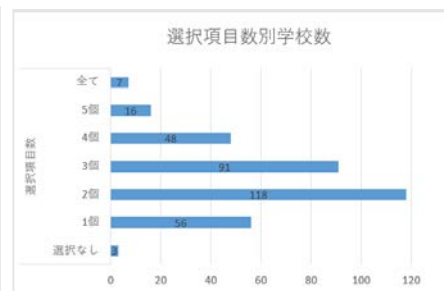
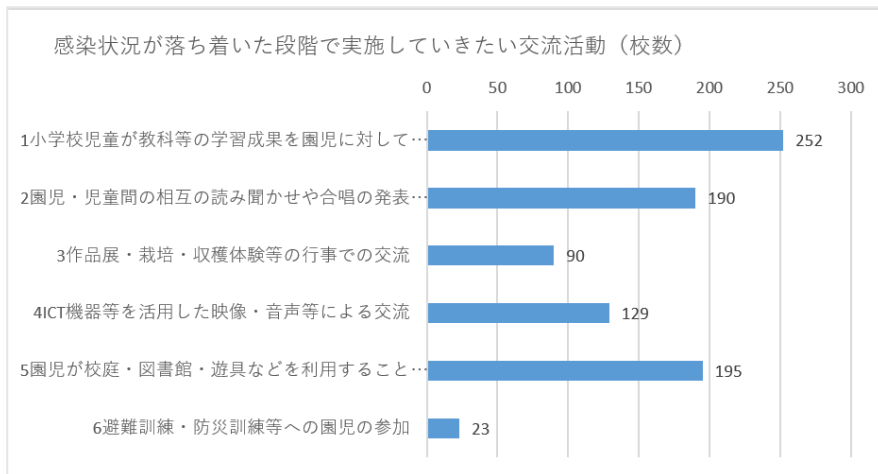


※本アンケート調査のみから導けるものではないが、推進地区等を訪問していると、園児との交流は低学年を中心に行わなければならないと誤解されている場合もある。実際には、5年生と年長児がチューリップなどの球根を植える交流活動を行い、入学後に一緒に育てるなどの連携を行っている学校もある。また、総合的な学習の時間や国語など、言語活動の対象として、園児との交流を活用している事例も見られる。さらに、学年末の交流では、5年生が主となって就学時を迎え、入学式当日は6年生として新1年生を見守るという形をとっている学校もある。

問3 感染状況が落ち着いた段階で、実施していききたい交流活動を教えてください。

(あてはまるもの全てを選択)

1	小学校児童が教科等の学習成果を園児に対して発表する形の交流。	252
2	園児・児童間の相互の読み聞かせや合唱の発表など、双方の学習に資する交流。	190
3	作品展・栽培・収穫体験等の行事での交流。	90
4	ICT機器等を活用した映像・音声等による交流。	129
5	園児が校庭・図書館・遊具などを利用することによる、小学校児童との出会い	195
6	避難訓練・防災訓練等への園児の参加	23



【分析】

・「学習成果を園児に発表する形の交流」を選択した学校が、全体の 74%と高い数値を示している。感染症拡大防止の観点から、これまで行われていた学習活動と関連付けた交流が制限されたため、そのような活動を改めて行っていききたいという意図が反映したものと思われる。児童が相手意識をもって言語活動を行うことができる価値のある場と捉えているとも考えられる。

・反対に、作品展や ICT の活用による交流の数値が低いのは、当該期間でも行った学校が多いことから(問1 参照)「感染状況が落ち着いた段階で」という設問が影響し、低くなっていることが考えられる。また、改めて、間接的ではなく、直接的な交流活動が必要とされていると読み取ることもできる。

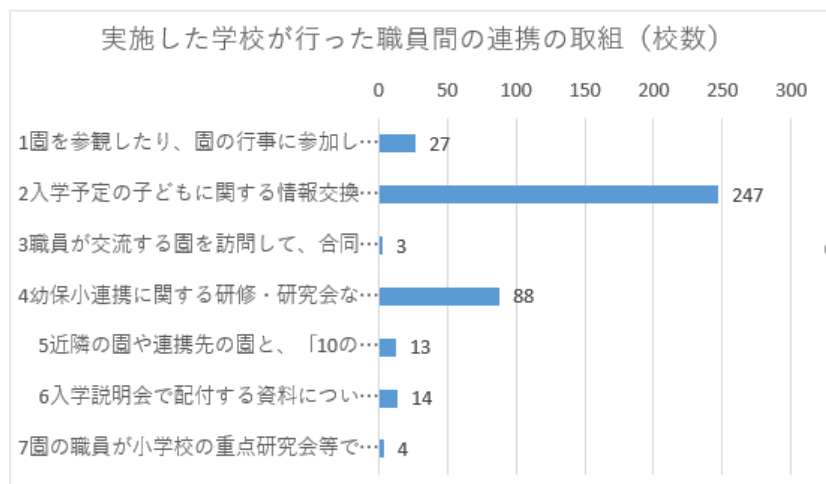
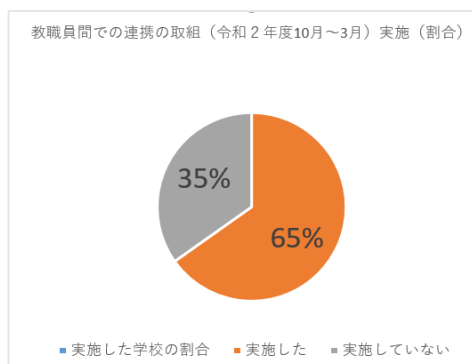
・6項目全てを「行いたい」とした学校が7校ある。また、3項目以上選択した学校を合わせると、71%に上る。交流活動を価値のあるものと捉えていると考えられる。

Ⅱ 幼保小の職員間の連携に関すること (区やブロックの交流事業も含みます)

問4 2020年10月～2021年3月に実施した教職員間での連携の取組を教えてください。

(あてはまるもの全てを選択)

1	新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、実施しなかった	118
2	園を参観したり、園の行事に参加したりした (オンラインでの実施を含む)	27
3	入学予定の子どもに関する情報交換や日頃の子どもの様子について話し合いをした	247
4	職員が交流する園を訪問して、合同で保育や授業を行った	3
5	幼保小連携に関する研修・研究会などに参加した (オンラインでの実施を含む)	88
6	近隣の園や連携先の園と、「10の姿」を理解・共有する機会を設定した。(オンラインでの実施を含む)	13
7	入学説明会で配付する資料について、園と相談し、保護者の必要感を探った	14
8	園の職員が小学校の重点研究会等で協議に参加した (オンラインでの実施を含む)	4



【分析】

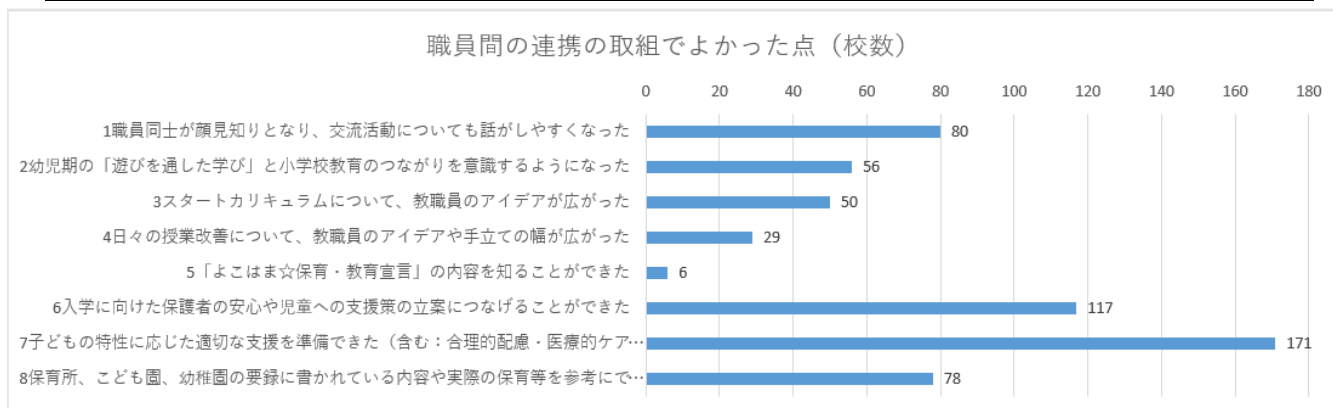
・まず、この設問で焦点を当てたいところが、「6.近隣の園や連携先の園と、『10の姿』を理解・共有する機会を設定した。」である。今後、教育委員会事務局、こども青少年局共に重視していきたいと考えている数値だが、13校で実施(約4%)となっている。この機会を設定する必要性に合わせ、研修の方法も含めて、積極的な情報提供が求められる。

・「4.入学予定の子どもに関する情報交換や日頃の子どもの様子について話し合いをした」について、児童支援専任が中心となり、積極的な職員間の連携が進んでいると思われる。コロナ禍ではあったが、73%の学校で行われていることが分かる。

・4校で、小学校の重点研究会等の協議に、園の職員が参加していた。現行の学習指導要領で「低学年教育の充実」が示されており、幼保小の先生が協働してカリキュラムや授業を考えていくことは、今後の幼保小連携・接続の鍵になる部分だと思っている。具体的な事例を収集していきたい。

問5 職員間の連携を図る取組を実施してよかった点は何ですか。 (あてはまるもの全てを選択)

1	実施できなかったのわからない	105
2	職員同士が顔見知りとなり、交流活動についても話がしやすくなった	80
3	幼児期の「遊びを通した学び」と小学校教育のつながりを意識するようになった	56
4	スタートカリキュラムについて、教職員のアイデアが広がった	50
5	日々の授業改善について、教職員のアイデアや手立ての幅が広がった	29
6	「よこはま☆保育・教育宣言」の内容を知ることができた	6
7	入学に向けた保護者の安心や児童への支援策の立案につなげることができた	117
8	子どもの特性に応じた適切な支援を準備できた(含む:合理的配慮・医療的ケアなど)	171
9	保育所、こども園、幼稚園の要録に書かれている内容や実際の保育等を参考にできた	78



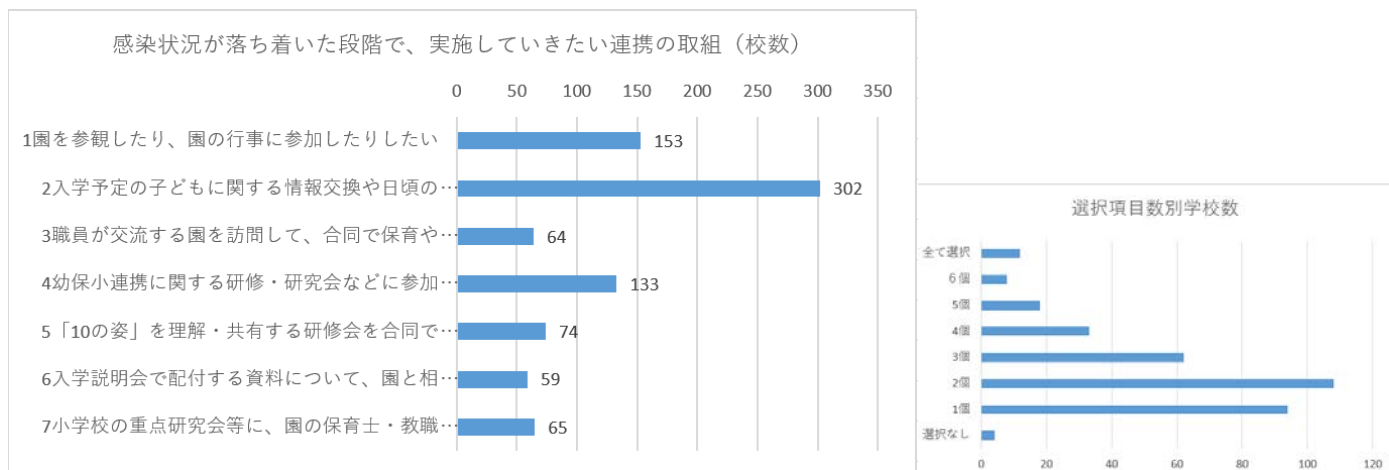
接続に関する設問選択		
項目2～4 選択	2つ選択	18校
	2と3	10
	3と4	6
	2と4	2
項目2～4	全て選択	13校

- ・入学に向けた保護者の安心や児童の支援など、子どもが安心して教育を受けることができるようにするための一つの視点として、幼保小の職員間の連携が活用されていることが分かる。
- ・今後の幼保小の接続の観点から注目しているのは、2～4の3項目である。この3項目すべてを選択した学校が13校あり、学校の教育改善に幼保小の視点を取り入れている学校が出始めていることが分かる。「3スタートカリキュラムのアイデアが広がる」を選択した学校は50校(15%)あり、今後も継続して、園の職員も一緒にスタートカリキュラムを考える機会の必要性を発信していきたい。
- ・教職員間の連携において「よこはま☆保育・教育宣言」はほぼ活用されていない。小学校への配布も含めて、今後、事例集第8集とともに広めていきたい。

問6 感染状況が落ち着いた段階で、実施していききたい連携の取組を教えてください。

(あてはまるもの全てを選択)

1	園を参観したり、園の行事に参加したりしたい	153
2	入学予定の子どもに関する情報交換や日頃の子どもの様子について話合いをしたい	302
3	職員が交流する園を訪問して、合同で保育や授業を行いたい	64
4	幼保小連携に関する研修・研究会などに参加したい	133
5	「10の姿」を理解・共有する研修会を合同で行いたい	74
6	入学説明会で配付する資料について、園と相談したい	59
7	小学校の重点研究会等に、園の保育士・教職員の参加を促したい	65



【分析】

- ・入学予定の子どもに関する情報の必要性を、ほとんどの学校 (全体の 89%) で感じていることが分かる。
- ・園を参観することが全体の約半数、幼保小連携に関する研修・研究会などに参加したいとした学校が、39%ほどある。
- ・こども青少年局としては、「5. 『10の姿』を理解・共有する研修会を合同で行いたい」という項目に着目している。現状では、74校 (22%) が、今後実施していききたい連携の取組としてこの項目を挙げている。学習指導要領の総則でも言及されているように、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた指導を工夫することにより、(中略) 児童が主体的に自己を発揮しながら、学びに向かうことが可能となるようにすること」について配慮をし、学校段階間の接続を図ることが求められている。今後も経年変化でこの項目を分析していきたい。
- ・すべて実施したいとした学校が 12 校ある。

Ⅲ スタートカリキュラムに関すること

※スタートカリキュラムとは、幼児期の教育から小学校教育への円滑な接続を大切に、入学当初のカリキュラムのことです。ねらいは、①安心して学校生活をスタートし、集団の中で自己発揮できるようにすること ②学級の一員としての自覚をもって、協同的に活動することができるようにすること ③幼児期に身に付けた力を発揮して、各教科の学習に円滑に移行し、主体的に学ぶことの3点です。

問7 今年度(令和3年度)のスタートカリキュラムは、どのような指導の工夫を図りましたか。

(左から「まったくあてはまらない」「あまりあてはまらない」「まああてはまる」「とてもあてはまる」)

1	3つの密を避けつつ、子どもたちが友達と関わったり、友達のことを知ったりすることができる活動を工夫した(なかよしタイム)		-20	201	118
2	教室のレイアウトを変更したり、フリースペースや体育館、校庭などの環境設定を工夫したりし、子どもが主体的に、自由に遊ぶ時間を確保した(なかよしタイム)	-16	-106	161	56
3	生活科を中心とした学習活動では、思いや願いを生かすために、ICTや学習カード、思考ツール等を活用し、対話的に取り組めるよう工夫した(わくわくタイム)	-3	-64	205	67
4	教科等で育てたい資質・能力と、生活科で育てたい資質・能力のつながりを、教職員が意識できるような活動計画等や単元構想図などを作成し、児童に育成を目指す力に基づいたスタートカリキュラムマネジメントを行った(わくわくタイム)	-1	-68	217	53
5	教科等を中心とした学習活動では、普段の生活や体験的な活動などのきっかけを大切にして、子どもの興味・関心に添った授業を工夫した(ぐんぐんタイム)	-1	-10	209	119
6	文字を書いたり数を数えたりする学習活動について、特別活動や生活科、行事などを通して子どもが「手紙を書きたい」「いくつあるか比べたい」などの必要感を醸成してから指導するなど、児童が主体的に学習に取り組めるよう意識した(ぐんぐんタイム)	-1	-36	234	68

問8 今年度(令和3年度)のスタートカリキュラムの編成・実施にあたって、留意したことは何ですか。

(左から「まったくあてはまらない」「あまりあてはまらない」「まああてはまる」「とてもあてはまる」)

1	学校職員全員で、例えば1年生の学校探検等の単元計画や配慮事項を職員会議や打ち合わせなどで共有するなど、共通理解をのもって実施した	-5	-69	160	105
2	様々な学習や登校後、休み時間などの時間では、1学年担任以外の多くの職員がかかわることを心掛けた	-2	-43	158	136
3	児童支援専任や特別支援コーディネーターがかかりながら、子どもの学びや育ちを支える環境について検討し、改善するようにした	-19	131	189	
4	近隣園や連携先の園の大切にしている環境的な支援(安心できる空間や遊びの場づくり・視覚に訴える掲示物等)を、小学校での環境づくりに生かした	-15	-147	150	26
5	幼児期の終わりまでに育ってほしい姿(10の姿)を踏まえ、園で培われた力や個々のよさが発揮されることを期待してスタートカリキュラムを編成・実施した	-5	-84	212	38
6	スタートカリキュラムの取組が、低学年(1～2年)全体のカリキュラム・マネジメントに生かせるよう、低学年及び他の職員が協働することを心掛けた	-4	-68	204	63

【分析 問7～問8】

- ・児童支援専任や特別支援コーディネーターが関わりながら、環境改善に取り組むと答えた学校の割合が高く、「とてもあてはまる」と答えた学校数も多い。
- ・園での子どもの環境(時間的・空間的)に小学校の環境(時間的・空間的)構成を寄せていくという取組みについて、問7-2、問8-4ともに、最も低い数値を示している。
- ・スタートカリキュラムの中では、「なかよしタイム」のマネジメントが進みにくい状況がある。
- ・こども青少年局として注目している「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の活用に関する設問8-5について、「まああてはまる」「とてもあてはまる」の合計値では、250校と高い数値を示すが、「とてもあてはまる」だけでは、38校となる。

問9 今年度（令和3年度）のスタートカリキュラムでは、児童にとって、特にどのような成果があったと考えられますか。

（左から「まったくあてはまらない」「あまりあてはまらない」「まああてはまる」「とてもあてはまる」）

1	新しい友達や職員と人間関係を築き、安心して学校生活をスタートすることができた	-4	192	143	
2	園での育ちや学びを生かしながら、学習活動を充実させることができた	-32	236	71	
3	活動の見通しをもったり、振り返ったりするなど、主体的に取り組もうとする姿が見られた	-21	242	76	
4	自分の思いや考えを伝え合い、言葉を交わしながら協働する楽しさを感じている姿が見られた	-1	-28	225	85
5	身近な環境と繰り返し関わることで、活動に対する満足感や達成感を積み重ねる姿が見られた	-13	231	95	
6	学習や生活の約束などを、子どもたちが自ら考えられるようになってきた	-1	-27	235	76
7	学校生活への期待感や、安心感が、児童の登校意欲を支えた	-4	232	103	

問10 今年度（令和3年度）のスタートカリキュラムでは、職員にとって、特にどのような成果があったと考えられますか。

（左から「まったくあてはまらない」「あまりあてはまらない」「まああてはまる」「とてもあてはまる」）

1	職員の子ども理解が進み、一人ひとりに応じた支援ができるようになってきた	-11	230	97	
2	児童の人間性など、規準を用いた評価にはそぐわないとされた児童一人一人のよさや得意なことに対して、職員が目向けたり、話題にしたりすることが多くなった	-118	217	103	
3	スタートカリキュラムの実施をきっかけに、職員が子ども観や学校教育目標、教科横断的に育成を目指す資質・能力（いわゆる「ぐるぐる」）を見つめなおし、学校で実現を目指す子ども像についてイメージを共有することができた	-4	-101	200	34
4	スタートカリキュラムの理解のもと、学校全体で1年生を支援する体制ができた	-2	-37	193	107
5	他学年や専科の教職員が、学級経営や授業づくりをする際に、スタートカリキュラムでの児童の学びが活用されたり、ヒントになったりした	-8	-116	174	41
6	1年生の保護者の安心につながった	-19	229	91	

【分析 問9～問10】

- ・多くの学校が、スタートカリキュラムの児童にとっての成果として、児童が安心した学校生活をスタートするために役立っていると感じていることが分かる。
- ・他に、「とてもあてはまる」の割合が高かったところに注目すると、「児童の登校意欲を支えた」という成果が際立っている。スタートカリキュラムを見直すことにより、登校渋りが減ったという報告も受けている。スタートカリキュラムが、児童の登校意欲につながっていると考える学校が多くある。
- ・身近な環境と繰り返し関わることで、満足感や達成感を積み重ねる姿につながっていると答えた学校も多い。

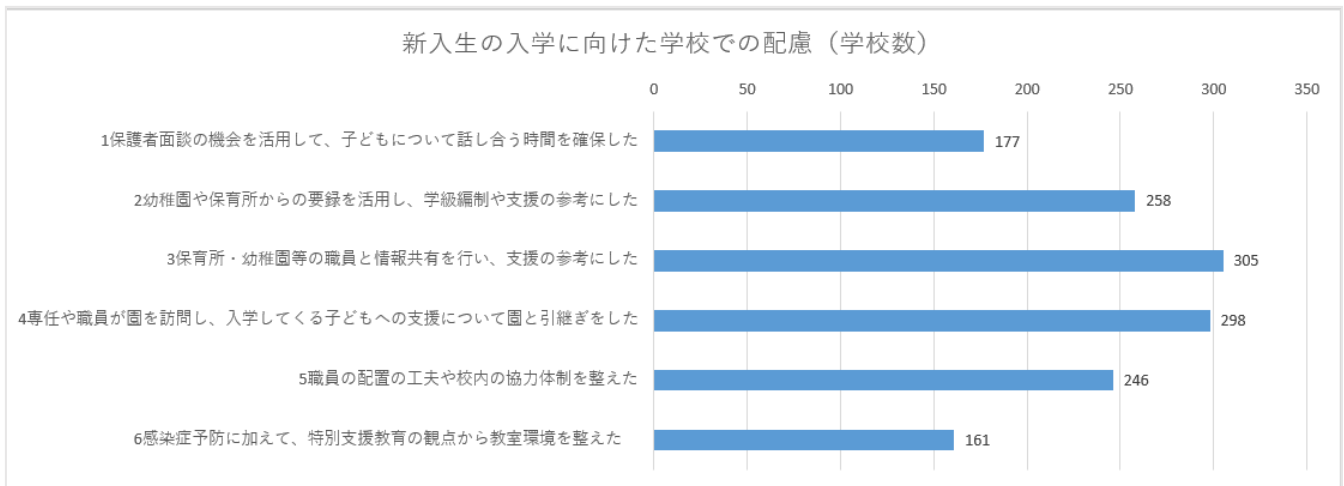
問 11 今年度のスタートカリキュラムにおいて、上記以外の成果や課題があれば記述してください。
(抜粋)

- ・学年職員で児童の話が共有できた。
- ・児童自身が段階的に学校生活に慣れることができたので、安心して学校生活を送ることができた。
- ・学年の担任だけでなく様々な教職員がかかわることで、学校全体で1年生を見守ることができた。
- ・手遊びや歌に合わせて関わるなどを職員で常に共有したことで定着し、安心につながり、学校の財産となった。
- ・昨年度、今年度と実施したスタートカリキュラムでの活動についてまとめ、カリキュラムとして作成した。また、今年度は、学校探検の際に入ってもいい教室として、各教室の先生に方にご協力いただき、一年生が入ってもよいときには、「どうぞ」札を付けてもらった。先生方だけでなく、他の学年の児童も、一年生を歓迎してくれるような雰囲気もあった。
- ・学校生活に慣れるのが早く、子どもたちが生き生きと自分の思いを伝えながら活動する姿がたくさん見られた。スタートカリキュラムを進めていくためには、校内の職員の協力が不可欠であるため、ねらいなど十分な共通理解が大切だと改めて感じた。
- ・保育園の職員が4月に1年生の教室で手遊びや紙芝居をしてくれた。安心した表情をしていた。
- ・コロナ禍において制約が多い中での実施となったことで課題が多かった。
- ・子どもの主体性に合わせたスタートカリキュラムと教科書の進度のバランスの取り方が難しいと感じた。指導書には、「〇月頃～」といった表記が書いてあり、その通りに進めなくてはという思いもあった。
- ・問9の③④⑥に見られる姿について、今年度、そして昨年度の1年生の子どもの育ちや活動への取組み方を見てきて、校内では課題とらえている。コロナによる影響は、関わる力や自己発揮などに大きくかかわっていると感じている。昨年度、一昨年度の幼保の現場での取組や子どもの育ちをについて育ちの面から語り合っていく必要があると感じる。区幼保小交流事業や接続期カリ推進地区で話題にしている。
- ・スタートカリキュラムを主に支えるチームの運営が、毎年の課題。カリに沿って、動くことや、必要性について、共通理解をはかり、こまめに打ち合わせをもったが、校内に浸透しにくかった。遊びや、そこから生まれる活動、安心して、活動を始める環境を整える大切さを、さらに伝えていく必要がある。
- ・コロナ禍で、保育園や幼稚園での生活との差が大きくなったと感じる。児童を同じ向きに座らせなければならなかったり、常にマスクが必要であったり、とても戸惑っていた。
- ・主体的に自由に遊べるようななかよしタイムにするためにフリースペース遊びが発展していくようなものの準備等の工夫をもっとした方がよかったです。来年度は課題として取り組んでいきたいと思っています。
- ・全職員が共通理解することが必要であり、1年生の実態把握にもなるので、研修を定期的に行う必要があると感じる。
- ・スタートカリキュラムのねらいや意義が職員全員に伝わっていない。
- ・なかよしタイムの実施は、学校全体で進められないと難しい。
- ・スタートカリキュラムの実施が6年間を通してどのような位置づけになり、子どもの成長の基盤となるのかを、今後全職員で研修等を行い、共通理解を深めていく必要がある。

IV その他

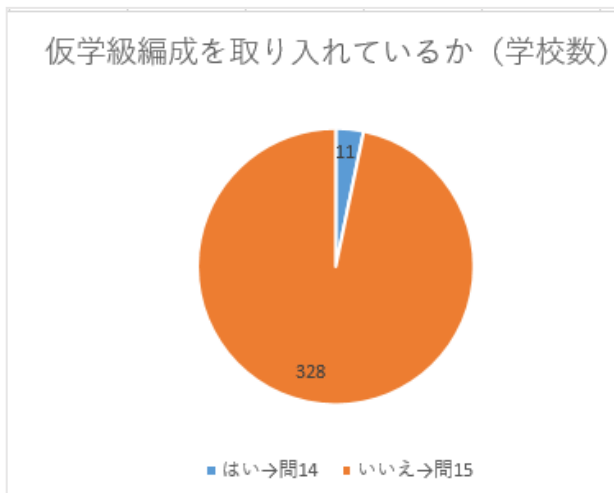
問 12 新入生の入学に向けて学校ではどのような配慮を行いましたか。(あてはまるものすべてを選択)

1	保護者面談の機会を活用して、子どもについて話し合う時間を確保した	161
2	幼稚園や保育所からの要録を活用し、学級編制や支援の参考にした	246
3	保育所・幼稚園等の職員と情報共有を行い、支援の参考にした	298
4	専任や職員が園を訪問し、入学してくる子どもへの支援について園と引継ぎをした	305
5	職員の配置の工夫や校内の協力体制を整えた	258
6	感染症予防に加えて、特別支援教育の観点から教室環境を整えた	177



問 13 今年度（令和3年度）、1年生では、仮学級編制を取り入れましたか。

取り入れている	11校
取り入れていない	328校



（問 14）取り入れた理由

- ・安定した学級経営ができるようにするため。
- ・クラスをスタートして、児童の様子を観て、よりよい学級編成が行われるため。
- ・発達段階にあっていると感じたから。
- ・子どもの特性を見極め、よりよい学級編成を行うため。
- ・入学してからの児童間や保護者間など、事前に把握していることをもとにして、小学校生活がスムーズに進むようにするため。
- ・複数の職員で児童の様子を把握し、支援に活かすため。
- ・今年度は取り入れなかったが、クラスによって子どもの偏りを感じたので、今後取り入れる方向で進めていきたい。
- ・仮編成で子どもたちを見取り、保護者も児童も本編成で児童が安心して登校できることを目指すため。また、仮編成中に保護者からの要望などがあった場合に対応することができるため。
- ・入学後の児童の様子を見とり、個々の児童に応じた支援につなげる。
- ・本学級スタート後の担任の負担を減らす。
- ・実際に担当する教員で新1年生の全児童を見て、学級編成を行いたいため。同じ保育園から2名しか来ない子は同じ仮学級でスタートさせ、不安を軽減するため。国際教室や特別支援での学びを必要とする子を見極めて、編成に配慮するため。

問 15 (任意回答) スタートカリキュラムと学校教育目標で目指す子どもの姿の関連について (抜粋)

【資質・能力とスタートカリキュラム】

- ・スタートカリキュラムだけでは育たない。日々の学年や学校のカリキュラムをいかにつなげていくかが大切だと考えます。
- ・主体的に行動しようとする素地が出来つつある。
- ・疑問に思ったこと、やりたいことを進んで表現する場面が見られた。
- ・課題に対して主体的に取り組もうとする子どもが増えたように思います。
- ・スタートカリキュラムそのものがその後の資質・能力の育成につながったという感じはしません。まだまだ、スタートカリキュラムのことを理解しその後を意図して実践できる職員が少ないように感じます。
- ・学習の中で、子供たちから自然とやりたい、やってみよう等の声が上がってきた。

どんなことをしたいか、積極的に意見を言う様子も見られた。

- ・本校では、生活科と社会を研究しています。1年生はじめのカリキュラムや低学年の生活科で培った主体性や探究心、夢中になる姿が、3年生～6年生の学習意欲、生活面での安定に引き継がれているように感じます。
- ・保護者は「わくわく・ぐんぐん・なかよし」よりも、教科で知らせてもらった方がよいと思っているようです。最初の約1週間、複数教員で対応することが、保護者、子どもの安心につながっていると思います。

【安心して学びに向かう】

- ・学校に対する不安感が多少なりとも少なくなり、幼稚園・保育園からの繋がりが感じられた。同じ図書を揃えたり、遊び道具(カラーコップ等)を揃えたりしたことで、安心する児童もいた。環境面での準備も必要と感じた。幼保小の担当をしたことで、図書購入や道具購入が計画的にできた。入門期の不安を少しでも少なくする工夫も学校全体で行え、良かった。
- ・スタートカリキュラムを行うことで、不安が強い子、支援が必要な子などが安心して学校に通える環境にすることができたと思います。
- ・スタートカリキュラムを実施することで、幼・保との接続がスムーズになり、児童がより安心して学校生活を送ることができるようになっている。職員にとってもスタートカリキュラムが定着し学級経営に生かされている。
- ・コロナ禍の状況の中、より緩やかな小学校への入口としてスタートカリキュラムを考えた。そのことで、安心して小学校生活をスタートできた児童が多かった。
- ・なかよしタイムやわくわくタイム等を取り入れ、小学校へのゆるやかな接続を行ったことで、学校に対する安心感や、学習への意欲の基盤ができた。
- ・幼稚園とのつながりを生かして、同じようなことができる時間を確保することで、小学校でも安心して過ごせるようになった。
- ・スタートカリキュラム実施のおかげで、教師も子どもも安心して学校生活をスタートさせることができている。このことは学年が上がっても学年開き、学級開きの参考になり、スムーズなスタートができている。
- ・学校生活にスムーズに慣れることができ、学校が楽しいと思える児童が増えた。子どもの主体的な態度を大切にすることで、自己肯定感が高まったと思われる。

【教科等の学びへの影響】

- ・生活科や総合的な学習の時間で主体的に課題に取り組む力がついてきていると思う。
- ・幼・保と小学校の間の段差はかなり埋まって、小学校のギャップは少なくなったように感じる。むしろ、小学校の中で、スタートカリキュラムを組むように、合体のカリにつなげていくかが、課題と考える。学年で交流することによって、いろいろ子との関わりに慣れることができた。
- ・スタートカリキュラムを充実させることで生活科や総合的な学習の時間の理解、実践につながる。

学校生活のスタートにあたり、まず自分達の思い・疑問をもとに学習が進んでいくという経験を積んでいったことで、身の周りの物事をよく見つけ、関わっていく方法と意欲が身についたと感じています。また、地域に出てまちの様子やまちの人々と直接関わることで、3年生以上になっても社会科・総合的な学習の時間等でまちの問題に取り組んだり、まちの人に相談していったりすることがあたり前となっています。

【先生方のカリマネへの効果】

- ・教科横断的な視点で、カリキュラムマネジメントを柔軟に行うことができるようになってきた。常に職員間で、目指す子どもの姿を共有することで、身に付けたい力を学年間だけでなく、縦のつながりを意識しながら、目指す子どもの姿を考えられるようになった。
- ・幼保小連携推進地区として、子ども像を共有しながら関連を進めている。
「こうなったらいいな」「こんなことしてみたい」といった気持ちを素直に表現できる児童が増えたように感じています。友達と協力して学習することにも自然に取り組める様子が見られます。
- ・誰もが不安を感じる新入学後の時期を安定して過ごすことが可能となったので、年度初めの5・6月に全校が関わる大きな行事（運動会・全校遠足など）を行うことができ、年間を通して異学年による縦割りでの活動を通して、互いを思いやる心を育むことができるようになってきた。
- ・スタートカリキュラムの実施がその後の6年間にどのような影響を与えたかまでは不明。ただ、スタートカリキュラムの実施により多くの新1年生が登校しぶりを免れたことと思う。
- ・幼稚園や保育園の職員と入学予定の子どもに関する情報交換を積極的に行い、子どもの特性に応じた適切な支援準備を行うことができた。入学後も特性に応じた合理的な配慮を行い、学習支援をすることで効果をあげている。また、最上級生の6年生のクラスを同じフロアに配置することで、6年生のサポートを受けやすくし、新入生児童が新たな環境に慣れるまでの一助となっている。
- ・2年、6年がとくに1年生とのかかわりが多いですが、学校全体で1年生に関わろうとする気持ちが高まった。（自分たちも1年生の時に～をしてもらった。という経験があるので）
- ・スタートカリキュラムで人との関わりを積極的に楽しんだり、生活のなかの疑問から課題を発見したりすることで、自ら学びを探して探求していく力が付いてきている
- ・学校教育目標に示した姿とスタートカリキュラムで主体的に取り組む姿がつながっていて、学びの充実につながっていた。
- ・スタートカリキュラムを行うことで、安心感をもつことができ、大切な1年生のスタートから自分を出すことができる子どもも増えていると感じる。また、自分を積極的にだすことができない子どもも、他の子どもの自分をだしている姿をみることで、「だしていい場所なのだ」と感じているように思う。この小学校生活のスタートの場面で、そのように感じることににより、学校という場所への所属感が増しているように感じる。
- ・スタートカリキュラムを行うことにより、教師側もスタートや学習規律やルール（指導しておかなければいけないこと）をそろえることができ、それによって「小学校という場所のルール」のようなものが子どもにスーッと入っているように感じる。1年生での指導が、6年生までの学校や学習ルールにつながっていて、それを守ろうとする気持ちにつながっていると感じる。"
- ・スタートカリキュラムの本格実施をしてから、朝の登校渋りは減ったと思います。安心した環境がそうさせているのかもしれませんが。
- ・一年生にとって来年入学してくる子どもたちに学校のことを優しく教えてあげようという目標をもって取り組む活動には子どもたちの純粋な思いが強く反映される。関わりをもちながら自分たちの活動が喜ばれたり、すごいねと褒められたりすることで子どもたちの自己肯定感は確実に高まっていく。
- ・本校ではスタートカリを始めて14年目となる。学校全体として取り組んでおり、6年生までの子どもの姿を見ていると、周りの環境に自ら関わっていく力や主体的、探究的に問題解決していく力はやはり6年間の積み重ねがあるからこそ積みあがって育っていると感じている。主体性、協働性、関わる力、意欲的に取り組む態度等は幼保から1年生につながり、それを6年間繋いでこそ資質能力が育成されていくのだと思う。途切れない、ということがやはり大切であると子ども達の姿を見ていて思います。

- ・コロナ禍の分散登校とも重なり、1年生が安心して、落ち着いてスタートできたと感じている。6年生まででしっかり取り組めた学年が、授業中も落ち着いているのはそれも理由の一つと感じる。スタートカリキュラムを行ったことで、多くの児童と関わり、考えを伝えたり認め合ったりする力が少しずつ身に付き、学校教育目標に近づくことができた。
 - ・スタートカリキュラムを実施したことで児童同士の関係の構築に役立った。支援を要する児童への対応を学校全体で取り組むことができた。
 - ・(事例ではなく、スタートカリキュラムについての感想ですが) スタートカリキュラムは、本来全職員で取り組むものではあるが、実際は、1年の担任や級外、専任にならないと関わる機会がない。なので、全職員がスタートカリキュラムについて理解し、実践するという経験を多くの職員がしないとスタートカリキュラムの充実につながっていかないと感じました。
 - ・質問したり、疑問におもったことについて話したりと、個々の中にある思いを外に出すことへの抵抗感がへった。
 - ・学校探検が充実し、自分の学校に愛着をもったり、1年生と職員との距離が縮まり、入学した年から堂々と過ごすことができています。
 - ・YPの調査をすると、スタートカリが充実しているとき、高自己評価群に集まる傾向がある。一人ひとりが自信をもっているというあらわれだと思う。
 - ・1年後半の学力や友だちとの関わる力がよく伸びるようになった。"
 - ・入学時に学校生活を安心してスタートすることができたので、2年生以降も自分のやりたいことを友達と一緒に実現させようとする子が増えてきた。
-
- ・学校が安心して自分の思いを伝えあいながら過ごせる場所であるという子どもたちや保護者の意識につながったと思います。
 - ・子ども同士の仲の深まりが早くなったことで、友達と協力して学習する楽しさを感じられる子が増えていると感じる。
 - ・学年の担任以外の教員が多く関わることによって、児童を見る視点が広がり、深まるため、児童理解が充実する効果を感じる。そのため、児童も「自分を知ってくれている先生がたくさんいる」という安心感が生まれ、自然と挨拶をしたり、話しができたりと、教員との関係性がよくなったと感じる。
 - ・スムーズに学校になれることができた。
 - ・スタートプログラムで主体性を十分に発揮できたこと、友だちとの触れ合いを十分に行ったことで、学校教育目標の実現につながっています。
 - ・学校のスタートカリキュラムを充実させたことで、幼稚園・保育園から入学してきた子どもたちが安心して教室で過ごすことができ、結果として学校教育目標の実現に繋げることができた。
 - ・スタートカリで集団活動の流れやルールなどにスムーズに移行できる子も多かったのではと考えます。また、スタートカリを充実させることは生活科の活動がより子どもにとっても自分事として捉えられたのではないかと考えます
 - ・コロナ前までは、幼稚園や保育園から小学校への移行がスムーズにできていました。
 - ・学校にはやく慣れることでさほどストレスを感じることなく自分のペースで学校生活を送れた。その結果、学校生活に対し希望と自信がもて、意欲的に過ごすことができた。学校は楽しいところという印象をもつことができた。
 - ・たくさんの職員に関わってもらうことで、大人の人と関わることへの抵抗感がなくなり、いろんな人と関わろうとする姿が見られた。
 - ・学校教育目標と関連している資質能力系統表を踏まえてカリキュラムづくりをして、まだ2年目なので、これから数年後の児童の姿として学びなどがかわってくると考えます。
 - ・「個」という価値から「集団」という中で過ごしていく中で、自分だけでなく、相手や周りの人たちを少しずつ意識する姿が見られるようになった。
 - ・多くの職員がかかわることで、一人ひとりの良さや可能性を発見することができ、子どもたちが達成感を味わうことができる支援に繋げることができた。
 - ・本校での実績ではないが、就学時健診をスタートカリキュラムの出発点と位置付けて行ったことにより、

子どものよさを見ようとする職員が増えるなど、意識改革につながった。

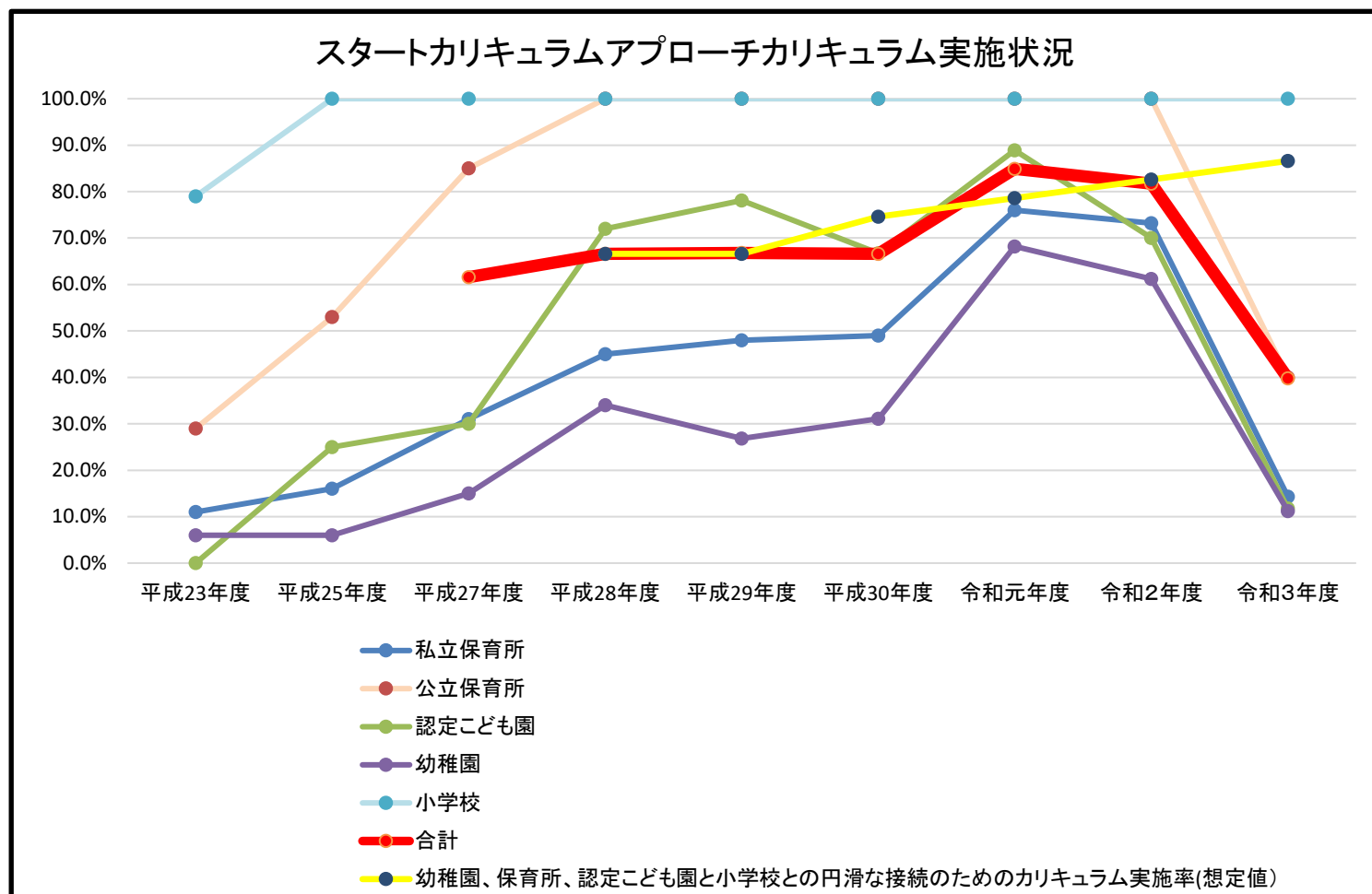
本校職員に話したら、「???」とびっくりされた。次年度から取り入れたいと思っているが、教職員の資質・能力の育成は児童のそれ以上に難しいと感じる。"

- スタートカリキュラムによって、ゆったりと過ごすことができ、幼稚園から小学校への移行がスムーズにできるようになってきた。
- 園との情報共有や交流などから、小学校は怖いところかもしれないという不安を年長児が抱いていること、保護者も就学に対しての不安を少なからず抱いていることがわかりました。「小学校でも、園の経験を生かして、自信をもって自分の思いや考えを出して行っていいんだよ。」ということ、入学したての子どもたちが実感できるように、スモールステップで給食当番や掃除のやり方を進めたり、子どもたちが見つけたことから小学校の秘密を探るという学校探検につなげたりと、子どもたちの思いを学習につなげていくことを念頭にスタートカリキュラムを実施していくことで、小学校に対する安心感が生まれ、その後の下学年を思いやる気持ちや行動につながっていったように感じます。それが、学校教育目標中の「つなぐ」ということにつながっていていると思います。
- コミュニケーションの力は育まれているように感じる。そのことが学校教育目標の実現につながっていると感じる。
- 今年度は、なかよしたいむなどで子どもの自由な発想を生かす活動が取りにくかったので、幼保とのギャップがなくなるように心がけて活動を計画した。ぐんぐんタイム等では、子どもの発想や思いを大切にしながら、学習内容を工夫した。
- 1年生の一年間の学校生活で、自信をもったり喜びを感じたりすることで、以降の学校生活や学習への意欲の高まりが期待できると感じた。
- スタートカリに取り組みむことで幼保時代から小学校への移行をスムーズに行うことができ、安心して小学校生活を送ることができた。スタートカリの中で友達と交流することで友達作りにつながった。

スタートカリキュラム/アプローチカリキュラム実施状況

平成27年度までは幼保小連携実態調査(隔年)の結果
 平成28年度から30年度は、公定価格の小学校接続加算(アプローチカリキュラムの提出が認定要件)が認められた施設数により算出
 ※新制度に移行していない園は対象外
 令和元年度以降は、横浜市幼保小連携実態調査」を毎年実施し、年長児の在籍するすべての園を対象にした設問のクロス集計から算出

	平成23年度	平成25年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度
私立保育所	11.0%	16.0%	31.0%	45.0%	48.0%	49.0%	76.0%	73.2%	14.3%
公立保育所	29.0%	53.0%	85.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	40.0%
認定こども園	調査なし	25.0%	30.0%	72.0%	78.1%	66.7%	88.9%	70.0%	11.8%
幼稚園	6.0%	6.0%	15.0%	34.0%	26.8%	31.1%	68.2%	61.2%	11.2%
小学校	79.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
合計			61.6%	66.6%	66.8%	66.6%	84.9%	81.7%	39.8%
幼稚園、保育所、認定こども園と小学校との円滑な接続のためのカリキュラム実施率(想定値)				66.6%	66.6%	74.6%	78.6%	82.6%	86.6%



令和3年度はコロナ禍にあり、幼保小の間で、交流活動や職員間連携への取組をそれぞれ複数回以上実施することができなかつたため、幼児教育施設側のカリキュラム実施率が下がりました。